VIEW next

学校の今に寄り添い、先生方とともに未来を描く

［ビューネクスト］高校版

2023 April

4

特集 新しい自分に出会う探究学習

指導変革の軌跡

京都府・私立
立命館中学校・高校

発問・課題設定をキーに見る
主体的・対話的で深い学び 授業実践

歴史総合
茨城県・私立東洋大学附属牛久中学校・高校
本保泰良

英語
神奈川県立川和高校
福田理奈

Photo Session at Cover

北海道・私立
帯広大谷高校

Benesse

未来を描く！ 創る！

イノベーティブな
生徒たち

第12回

エンジニア思考でコロナ禍に向き合い、「世界を変える10人」に選出

立崎乃衣（たつざきのい）さん（高校3年生）

千葉県・私立渋谷教育学園幕張中学校高校

9歳で初めてロボットを作り、小学5年生の時には、色を識別しながら自走するロボットを作った立崎乃衣（たつざきのい）さんが自宅から片道90分の同校に進学したのは、ロボット製作に力を入れる物理部がある学校だったから。世界最大級のロボットコンテストに挑戦する中高生から成るロボコンチームが立ち上がると、中学1年生の12月から参画。ロボット製作費に加えて、会場となるアメリカ各地への渡航費などを含む年間約700万円の活動費を支援する企業等をメンバーと探しながら、コンテストでは5年連続で入賞を果たした。

だが、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大という想定外の事態が発生。高校1年生になった立崎さんは、学校に通えない日々が続く中、マスクやフェイスシールドなどの個人用防護具が不足する状況下で、医療従事者が未知のウイルスと戦っていることを報道で知った。

「同じころ、アメリカでは、企業が3Dプリンターを使ってフェイスシールドを製造し、医療機関に寄付する活動を始めていました。それな

※プロフィールは、2023年3月時点のものです。

ら自分たち中高生でもできると思い、ロボコンチームのメンバーに提案しました」

しかし、配送業者との接触を始め、製造過程で生じる感染リスクを恐れる声が上がり、メンバーの合意は得られなかった。そこで立崎さんは、自宅を製造拠点にして個人で活動を開始。活動を告知するウェブサイトを立ち上げ、寄付金を募りながら、3Dプリンターで製造したフェイスシールドを知り合いの医師に使ってもらい、改良を重ねた。

「最初のうちは1個作るのに2時間ほどかかっていました。夜中も生産を止めないよう、2時間ごとに起きて、プリンターをセットし直しました。シールドの厚さを調整するなどして、最終的には製造時間を1時間短縮することができました」

立崎さんの活動がSNSで拡散されると、医療機関からの注文が急増。2020年の7月までに約1000個の寄付を達成した。学校再開後、ロボコンチームのメンバーに、自分たちが小さなリスクを負うことで医療従事者の大きなリスクを軽減できることを改めて訴え、20年8月からはチームで活動を開始。活動を知った個人や団体からフェイスシールドの素材を提供してもらいながら、2200個余りの寄付を行った。そして、20年10月、立崎さんは、世界有数のパソコンメーカーから、「世界を変える10人の若い女性」の1人に、日本人として唯一選出された。

フェイスシールドの寄付活動の中で、合意形成の難しさを実感したという立崎さん。

「どこまでリスクを取るかは個人の価値観によるため、話し合うだけではメンバーの考えはほとんど変わりませんでした。まずは1人で行動を起こして、自分の経験や周囲の反応とともに、チームやメンバー個人のメリット・デメリットを具体的に示すことで、みんなの考えが1つになっていきました」

世界中が混乱する中で、たった1人で行動を起こした立崎さん。だが、不安も恐れもなかったという。

「そもそもロボット製作は試行錯誤の連続で、たくさんのトラブルを解決して初めてロボットは動くようになります。フェイスシールドの製造でうまくいかないことがあっても、1つずつ乗り越えればよく、私1人の失敗を恐れるよりも、感染拡大防止という社会課題にスピーディーに向き合おうと思いました」

24年秋からの海外大学進学を念頭に、高校卒業後の1年間はギャップイヤーとして、国内企業でのインターンシップを経験する予定だ。

「目指しているのは、社会問題の解決を先導するエンジニアです。今は、特定の領域の問題に絞り込んではいません。社会はすごい速さで変化しているので、もっともっと自分の視野を広げていきたいと思っています」

学校プロフィール

設立 1983（昭和58）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数 1学年約350人
2022年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、東京医科歯科大、東京工業大、東京大、一橋大、京都大などに136人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大などに延べ589人が合格。海外大学進学36人。

イノベーションの**芽**を育てる
教師たち

千葉県・私立
渋谷教育学園幕張中学校高校
高校３学年担任
島村華子

没頭する中でこそ育まれる力がある

立崎さんは、輝かしい実績をひけらかすことなど一切ない、誰とでも仲よくできる人間的な魅力にあふれた生徒です。立崎さんのように、学校生活を通して没頭したいものが明確にある生徒は、本校にはたくさんいます。「個」が強い生徒が集まり、互いに刺激し合う中で、「渋幕的自由」と呼ばれる校風が醸成されています。例えば、もし生徒が、興味があることや大切なことに没頭するあまり、学校の課題がおろそかになりそうになったら、私たちは生徒と、「あなたはどうしたい？」と話し合い、互いが納得できる着地点を探します。自由と言っても、何でもありということではないですし、教師は口出しもしますが、生徒には自分で考えて行動するように促します。自分が没頭したいことだからこそ、失敗にもひるまずに、次はどうすればよいかを試行錯誤することができるのだと思います。

VIEWnext 高校版
2023 April 4

Contents

3 特集
新しい自分に出会う探究学習

巻頭 未来を描く！ 創る！
イノベーティブな生徒たち
立崎乃衣（たつざきのい）さん（高校3年生）
千葉県・私立
渋谷教育学園幕張中学校高校

40 これからの進路指導のための
世の中トレンド解説
トレンド・ワード
リスキリング

56 Reader's VIEW

25 For School Section

26 お勧めの分掌▶ 管理職 教務担当 進路担当
指導変革の軌跡
京都府・私立立命館中学校・高校
土曜授業の改革
わくわくする学び # 自由参加の「サタデーボックス」 # ボトムアップの改革

30 お勧めの分掌▶ 管理職 教務担当
──疑問や課題を解決！実践につながる！── 新課程レポート
テーマ 新課程初年度の総括と今後の展望
秋田県立湯沢高校
ルーブリックの活用 # 学び方を学ぶ # デジタルツールを活用した探究学習

34 お勧めの分掌▶ 学年団 担任
輝く学年団を訪ねて
長崎県立松浦高校 1学年団
普通科改革 # 地域科学科1期生の学年団 # 地域と連携した探究学習

38 お勧めの分掌▶ 管理職
学校危機管理 基礎講座
テーマ 個人情報の管理
要配慮個人情報 # 校内での共有 # 第三者への情報提供

41 For Teacher Section

42 お勧めの分掌▶ 教務担当 担任
発問・課題設定をキーに見る 主体的・対話的で深い学び 授業実践
42 歴史総合
茨城県・私立東洋大学附属牛久（うしく）中学校・高校 本保泰良（ほんぼたいら）
#「なぜ」を起点にした授業 # 単元を貫く問い #「過去」を「今」につなげる

46 英語
神奈川県立川和高校 福田理奈
#「総合的な探究の時間」と英語の連携 # 英語のプレゼン #外部連携

50 お勧めの分掌▶ 進路担当 学年団 担任
マイ・ストーリーを語れる生徒を育む進路指導
宮崎県立宮崎東高校 定時制課程夜間部
1年次 マイ・ストーリーを語るための土台づくり
自分を知る探究学習 # 5W2Hの視点 # マンダラート # 哲学対話

52 お勧めの分掌▶ 進路担当 学年団 担任
変化の激しい社会に飛び込む生徒に伴走 クローズアップ！ 就職指導
石川県立小松工業高校
働き続けるための資質・能力の育成 全学年
学校独自のラーニングコンパス # 1年次からの協働的な探究

https://view-next.benesse.jp/
本誌記事は、ウェブサイトVIEWnext ONLINEでもご覧いただけます。

印刷製本／（株）協同プレス
編集協力／（有）ペンダコ
執筆協力／二宮良太
撮影協力／荒川 潤、福山 哲、ヤマグチイッキ

※本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます。 ※本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます。
©Benesse Corporation 2023

新しい自分に出会う探究学習

「総合的な学習の時間」が「総合的な探究の時間」（以下、総合探究）へと変わり、「古典探究」や「地理探究」など、教科においても「探究」が名称に含まれる科目が複数新設されたことが象徴するように、実施２年目となる新学習指導要領では、探究的な学習活動（以下、探究学習）の充実が求められています。中でも総合探究などで行われるような探究学習は、“生徒主体”の学習活動などと言われますが、生徒主体と言っても、教師がその学習に何もかかわらないということではありません。では、“生徒主体”の探究学習とはどういった学習なのか、教師はそれにどうかかわるべきなのかと問われた時、教師間で共通認識が図れている学校はまだ多くはないようです。今回私は、２つの学校から、社会人の１人として、生徒が探究学習に取り組む場に立ち会う機会をいただきました。生徒たちとやり取りを重ねる中で、探究学習が、彼ら、彼女たちにとって、今までの自分を変える、新しい自分に出会う、そうした学びになっていると感じました。本特集は、その２校の探究学習を取材した記事を中心に、主体的に探究学習に取り組む生徒の姿や生徒にかかわる教師の考え、それに基づくアクションが、読者の先生方に具体的かつリアルに伝わることを目指しました。ぜひ、ご覧ください。

VIEWnext 編集部 統括責任者　**柏木 崇**

課題整理

P.4　**改めて考える、「探究学習」とはどのような学びか。それを実現する上での課題は**

実践リポート

P.6　学校現場編●**岩手県立遠野（とおの）高校**
答えが1つではない問いに、グループでどのように向き合うか

P.10　学校現場編●**長崎県・私立純心中学校・純心女子高校**
主体的に学ぶ授業とは？　生徒と教師が新しい授業を追究

P.14　教育委員会編●**青森県教育庁**
1人1課題に取り組む「あおもり創造学」で、地域課題を自分事として捉える

P.17　教育委員会編●**福井県教育庁**
生徒が「念（おも）い」を社会に発信する、全国規模の「プレゼン甲子園」を開催

本特集テーマのnext

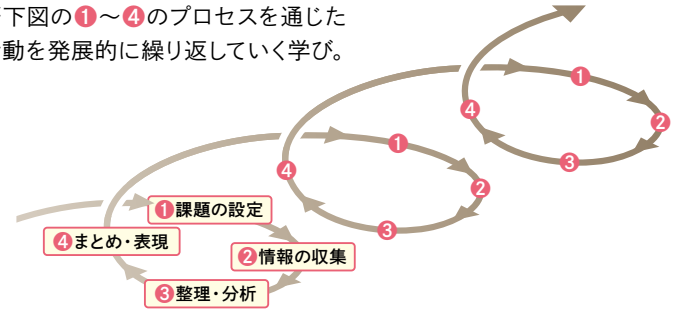
P.20　**探究のプロセスを見通しつつ、論理的・批判的に思考することができる「対話型論証モデル」で、探究の自走を図る**
京都大学大学院教育学研究科 教授 **松下佳代**／大阪府・私立高槻中学校・高校 教頭 **前田秀樹**
大阪府・私立高槻中学校・高校 ティーチング・アシスタント、京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 **田中孝平**

改めて考える、「探究学習」とはどのような学びか。それを実現する上での課題は

高校で新学習指導要領が実施されて1年が経った。探究学習に取り組む「総合的な探究の時間」については、授業をどのように進めればよいのか、教師は生徒にどうかかわればよいのか、学校現場からは、依然戸惑いの声が聞かれる。そこでここでは、改めて、探究学習とはどのような学びなのかについて考え、それを実現する上での課題を整理する。

1 探究における生徒の学習の姿

生徒が下図の❶～❹のプロセスを通じた学習活動を発展的に繰り返していく学び。



日常生活や社会に目を向け、生徒が自ら課題を設定する。 → 探究の過程を経由する。❶課題の設定 ❷情報の収集 ❸整理・分析 ❹まとめ・表現 → 自らの考えや課題が新たに更新され、探究の過程が繰り返される。

※文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」を基に編集部で作成。

2 探究に欠かせない生徒の主体性

探究では、生徒が、身近な人々や社会、自然に興味・関心をもち、それらに意欲的に関わろうとする**主体的、協働的な態度が欠かせない**。探究に主体的に取り組むというのは、**自らが設定した課題の解決に向けて真剣に本気になって学習活動に取り組むことを意味している**。それは、解決のために、見通しをもって、自ら計画を立てて学習に向かう姿でもある。

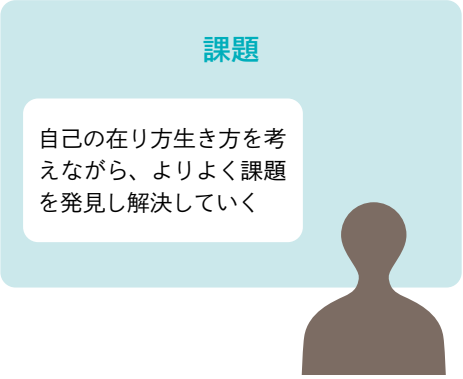
※文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」を基に編集部で作成。

2022年度から実施されている高校の新学習指導要領では、探究的な学習活動（以下、探究学習）の充実が求められている。改めて、「探究」とはどのような営みなのか。文部科学省「高等学校学習指導要領解説　総合的な探究の時間編」では、「探究」とは、「問題解決的な学習が発展的に繰り返されていく」ことであり、「物事の本質を自己との関わりで探り見極めようとする一連の知的営み」と定義している。

そして、「探究における生徒の学習の姿」として、探究のプロセスも提示され（❶）、実生活や実社会の課題について、生徒が探究のプロセスを通して考え、判断し、表現することが大切だと指摘している。さらに、「探究」において欠かせないものの1つとして、「生徒の主体性」を挙げ（❷）、生徒主体の探究学習が実現されている状態の1つが、生徒の設定する課題が「自分にとって関わりが深い課題（自己課題）」

4 課題と生徒との関係（イメージ）

自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を発見し、解決していく



※文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」を基に編集部で作成。

3 生徒の主体性を引き出す「自己課題」

高等学校においてこのような生徒の姿を実現していくに当たっては、生徒が取り組む探究がより洗練された質の高いものであることが求められる。質の高い探究とは、次の二つで考えることができる。（中略）もう一つは、探究が自律的に行われるということである。具体的には、**①自分にとって関わりが深い課題になる（自己課題）**、②探究の過程を見通しつつ、自分の力で進められる（運用）、③得られた知見を生かして社会に参画しようとする（社会参画）などの姿で捉えることができる。

※文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」を基に編集部で作成。

5 生徒主体の探究学習を実現する上での課題

- 探究そのものの理解が進んでいない。まだ言葉が独り歩きしていると感じる。
- 「探究」という言葉が難しく、生徒にどの程度「探究」させればよいか分からない。
- 全教員で共通認識を持って取り組むことが難しい。
- 生徒が探究学習の計画を立てる必要性は分かるが、その指導の仕方が分からない。
- 今行っている探究学習の方法が正しいのかどうか、迷っている教師は多いと思う。
- とにかく実践し、そこで浮かび上がった課題を次に改善するといった方法でしか、探究学習の指導の進め方が分からない。
- 生徒がどうすれば自己課題を設定できるのかが難しい。いろいろな支援をしているが、うまくいっていない。教師の働きかけによって課題を見つけることができた生徒の事例を知りたい。
- 探究学習は、教師でも想定しない事態が起こり得る。指導にあたっての教師の心構えや、最小限の必要な準備、教師間での意識・ノウハウの共有方法など、実践を知りたい。
- 探究学習が、単なる調べ学習になったり、安易なグループ学習に終わったりする場合がある。どうすれば探究が深まり、生徒にとって意味を持つ学びになるのか、つかみきれていない。

※『VIEW next』高校版読者モニターへのアンケート結果（2023年2月にウェブとファクスで実施。有効回答数は118）、次年度誌面に関する読者アンケート結果（2022年10月にウェブとファクスで実施、有効回答数は1,380）を基に編集部で作成。

になっていることであると説明している（❸）。それは、「総合的な探究の時間」などで行われる探究学習が、「自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を自ら発見し解決していくような学び」であるとも言えるだろう（❹）。

そうした生徒主体の探究学習が求められる中で、学校現場は様々な課題を抱えている（❺）。『VIEW next』高校版の読者モニターに実施したアンケートなどからは、探究学習がどのような学びかを捉えきれず、教師として生徒にどうかかわればよいのかが分からない様子がうかがえる。

以上のように、探究学習がどのような学びか定義され、それを推進する上での留意点が示されていても、学校現場においてその理解や教師間の共通認識が深まっていないのは、探究学習という学びや、それに取り組む生徒のあるべき姿、そして教師のかかわり方が、具体的にイメージしづらいからではないだろうか。

そこで今号は、帰納的にアプローチすべく、生徒が主体的に探究学習に取り組むとともに、教師が試行錯誤しながら彼ら・彼女たちを支援する2校の事例を紹介する。また、各校が生徒主体の探究学習を推進できるよう、県を挙げて学校現場を支援する動きが増えてきている。その事例として、青森県教育庁と福井県教育庁の取り組みを紹介する。

岩手県立遠野高校

答えが1つではない問いに、グループでどのように向き合うか

生徒が設定した課題

「中学生の数学力の向上のためのアクション」

自分を変えるチャンス！ 岩手県立遠野高校の2022年度の「総合的な探究の時間」で、「教育から地域課題へアプローチ フェーズ2」への参加を決めた佐藤千星さんは、並々ならぬ決意だった。1年次の「総合的な探究の時間」は、周囲の流れに身を任せてしまい、主体的に取り組むことができなかったからだ。

「活動が終わった時、この1年間は何だったのかと後悔しました。また同じ思いを味わうのは嫌だ。もっと自分で動こうと思いました」

佐藤さんが選択したゼミのミッションは、「中学生の数学力の向上」。岩手県では、全国学力学習状況調査の数学の正答率が、中学生になると急激に下がっていた。その状況に対して、高校生としてできることを考え、実際に行動してみようと、数学科の担当の佐藤紘大先生がゼミを立ち上げた。ゼミの活動計画書には、「本気で探究活動に取り組みたい人、自分を変える一歩を踏み出したい人を募集」とあった。自分を変えたいと思っていた佐藤さんにとって、最適なゼミだった。

6月の活動スタート時には、15人の生徒が集まった。佐藤さん同様、自分を変えたいという思いで同ゼミを選んだ浅沼大和さんは、活動開始直後から積極的に行動した。

「数学力の向上について自由にアイデアを出す場面では、勇気を出して自分から発言をしました。失敗を恐れずに行動する心地よさを、初

遠野高校の探究学習

「新しい『遠野物語』を創るプロジェクト」と名づけられた「総合的な探究の時間」の中で実施。遠野市役所や企業、大学などの支援を受け、地域遺産のデジタルアーカイブ化、空き家の利活用、地域の食生活の改善など、12のゼミを開講。生徒は自分の興味・関心に基づいてゼミを選択する。佐藤紘大先生が主催するゼミ「教育から地域課題へアプローチ」は、21年度に続いて2度目の開催。

お話を伺った**生徒**の皆さん

佐藤千星さん（2年生）

佐々木緑登さん（2年生）

浅沼大和さん（2年生）

留場紗叶さん（2年生）

山口晴大さん（2年生）

髙田耀莉さん（2年生）

※プロフィールは、2023年3月時点のものです。

めて味わえた気がしました」

ゼミの活動で決まっていたことは、1月に数学力の向上のためのアクションを起こすことだけ。それまでの間にどのような活動をするのかは、話し合って決めることになった。活動を円滑に進めるため、メンバーの活動をサポートしたり、悩みを聞いたりする「監督」を置くことも決定。自分を変えるために責任ある立場を担おうと考えた佐藤さん、浅沼さんを始め、5人が監督を務めることになった。また、担当の佐藤先生と親交のあったVIEWnext編集部統括責任者の柏木崇を社会人アドバイザーとして迎えることも決まった。

中学生の数学力が低下している原因

を探ろうと、生徒はグループに分かれて、中学校の教師や中学生への聞き取り、学力や学習意欲に関する調査研究データの収集を開始した。しかし、活動はすぐに停滞した。グループ内でのコミュニケーションが円滑に進まなかったのだ。生徒は週2コマの授業時間以外にも、放課後の時間やSNSを利用して話し合いを行ったが、思ったように意思疎通が図れなかった。

「書籍やウェブサイトで情報を集めている時は、誰よりもよい提案をしようという気持ちで前向きに取り組んでいました。でも、ほかのメンバーと数学力の向上のための具体的な方策を話し合う段階になると、自分の考えをうまく伝えられなかったですし、メンバーの意見もうまく引き出せませんでした。自分は全然駄目だと、すごく落ち込みました」（浅沼さん）

「意見を言ってほしいという気持ちが先走って、SNSにきつい口調で書き込んでしまったこともありましたが、状況は変わりませんでした。声のかけ方が下手すぎると、自己嫌悪に陥り、監督をやめたいと思いました」（佐藤さん）

部活動を優先

し、放課後やオンラインでの打ち合わせに欠席する生徒も出てきた。監督の1人、佐々木緑登（ろくと）さんは、そうした状況を打開しようと、全員に昼休みに集まってもらい、「ゼミの活動に力を入れよう」と呼びかけた。だが、それもすぐにはうまくいかなかった。

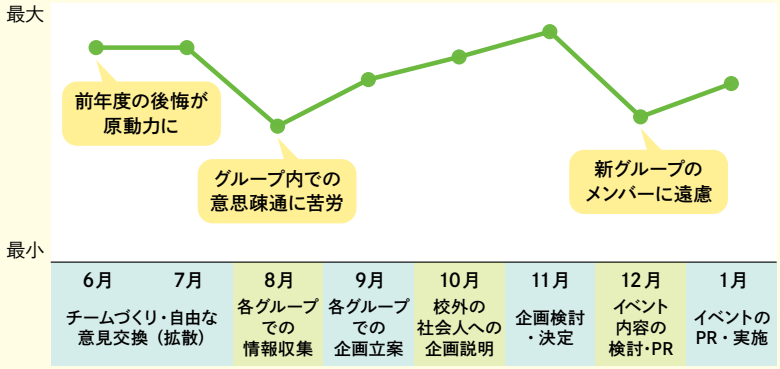
『一緒にやろう！』と声をかけている最中に、なぜか、自分の言葉がみんなに届いていないことが分かりました。実際、その後のSNSでの返信率も上がらず、どうすればよいのかと途方に暮れました」

全員の熱量が高まる転機

は10月に訪れた。佐藤先生は、社会人アドバイザーと相談し、取り組みを加速させる機会として、オンラインでの「企画プレゼンテーション」を実施することにしたのだ。監督の1人、留場紗叶（とめばすずか）さんは、高校生とは全く違う視点からのアドバイスに耳を傾けながら、自分たちの考えがどんどん深まっていく気がしてワクワクした。

「自分たちの考えを否定することなく聞いてもらえて、これからするべきことを一緒に整理

図 佐藤千星さんの活動に対する主体性の変化



してもらえた気がしました。企画プレゼンテーションの翌日、すぐに担当の佐藤先生に、『とてもよい時間でした！』と報告に行きました」

野球部の顧問に相談し、練習と折り合いをつけてプレゼンに参加した山口晴大（はると）さんにとっても、社会人のアドバイスは発見の連続だった。

「考えが甘いところをたくさん指摘されましたが、『こんなふうに考えるのか！』と驚くばかりでした。1時間以上議論したので、とても疲れましたが、一気に前進した気がしました」

「一緒にやろう！」という呼びかけはすぐには届かなかったが、「昼休みにみんなで集まって、ゼミについて気軽に話そう」という佐々木さんのアイデアは奏功した。

「SNSでは議論が進まなかったのに、毎日短時間でも対面で話すようにしたところ、いろいろなことが決まっていきました。もっと早くから、気軽に話し合える場をつくればよかったと思いました」（監督の1人、髙田耀莉（たかだかがり）さん）

11月、各グループからの企画の最終提案を経て、ゼミのアクションとして決まったのが、地元の中学生を招いて、様々な数学の問題に挑戦してもらうイベント「数学を楽しもう・深めよう」だ。遠野市役所と連携した中学校へのPR、数学の問題の精選など、するべきことが具体化すると、生徒の活動はさらに加速した。1月末のイベント当日は29人の中学生が参加。そして2月、全校生徒に対して行われたゼミの成果発表後のアンケートでは、「自分にとって学びや気づきがあったゼミ」、「発表を通じて最も感動したゼミ」で、いずれも佐藤先生のゼミが1位を獲得した。

生徒の中には悔いも残った。

「最終的に私は、自分たちのグループの企画よりも、ほかのグループの企画の方がゴールと手法が明確だと思い、そのグループに合流しました。でも、そのグループの人たちに遠慮して、主体的に動けなくなり、去年までの自分に少し戻ってしまった気がしました」（佐藤さん）

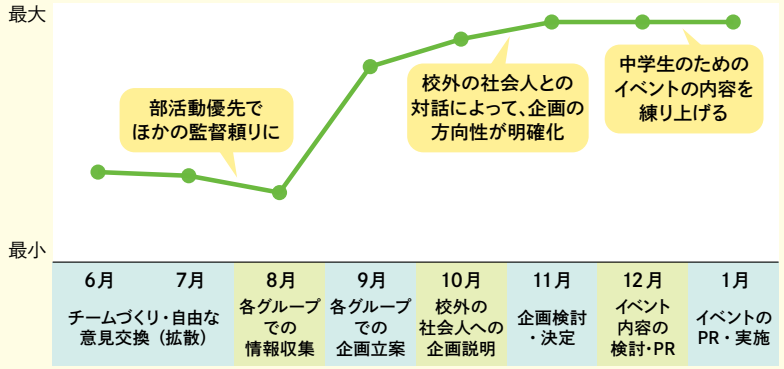
一方で佐藤さんは、自分の変化や成長も感じ取っている。

「ゼミの活動を通じて、自分にはなかった視点にたくさん気づけました。問題の解決に向けて複数の視点があるということは、1つの方法が駄目でも、別の方法で試せるということです。私は将来は教師になりたいと思っていますが、生徒が困難にぶつかった時、いろいろな視点で継続的に支援できる教師になろうと、今回の経験を通じて自分の将来像が明確になりました」

2月末、職員室にいた佐藤先生を浅沼さんと佐々木さんが訪ね、「来年度も、中学生の数学力の向上のためのアクションを考えたい」と申し出た。浅沼さんは佐藤先生にこう言った。

「つらいことや苦しいことがたくさんあった探究学習だったけれど、根拠を明確にすること、対話して考えることの大切さを学べました。そのすべてが僕の財産です」

図 髙田耀莉さんの活動に対する主体性の変化



●学校概要

設立 1901（明治34）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数 1学年約100人
2022年度入試合格実績（現役のみ） 国公立大は、室蘭工業大、弘前大、岩手大、山形大、茨城大、釧路公立大、岩手県立大、横浜市立大などに17人が合格。私立大は、岩手医科大、富士大、盛岡大、東北学院大、東北芸術工科大、獨協大、国士舘大などに延べ53人が合格。

担当教師と考える「探究学習における主体性」

岩手県立遠野高校
２学年担任
佐藤紘大 さとう・こうだい
教師歴 10 年。同校に赴任して５年目。数学科。

VIEW next編集部 統括責任者
柏木 崇 かしわぎ・たかし

探究学習のプロセスの中で、様々な生徒が入れ替わるように活躍

柏木　前半の活動では、主体的に動けないメンバーを、監督の生徒たちが引っ張ろうとしましたが、なかなかうまくいきませんでした。監督の１人である佐々木さんは、「後になって考えると、引っ張ろうとするのではなく、任せようとする態度でみんなに接した方がよかったかもしれない」と、私に話してくれましたが、一人ひとりが主体性と協働性を発揮する集団づくりの難しさを、私もひしひしと感じました。ただ、前半の活動で活躍したのは、熱量が高まりきれない生徒を引っ張ろうと苦労した監督たちであったことは確かです。そして、後半の活動で活躍したのは、前半は部活動優先であまり動けなかった生徒たちでした。

佐藤　前半と後半で活躍する生徒が交替したのは、本ゼミの大きな特徴だったと思います。前半、ゼミをどの方向に進めればよいのか全く見えない中で、勇気を持ってみんなを導こうとした生徒、企画が具体化してからイベント当日までの活動を牽引した生徒、イベント後の校内の成果発表で力を発揮した生徒と、様々な生徒が入れ替わるように活躍しました。私は、成長する組織は、きっと本ゼミのように、いろいろな人が自分の長所や強みを生かして、互いに助け、助けられる組織なのだと思います。生徒にとって本ゼミは、社会の縮図のような場だったのではないでしょうか。

柏木　「中学生の数学力の向上」という、考えられる方策が１つではない課題に対して、情報の収集、整理・分析、具体的なアクションの企画・実行、そしてまとめ・振り返りと、多様なプロセスを経験する探究学習だからこそ、様々な生徒が入れ替わるように活躍できたのかもしれませんね。

ただ寄り添うだけではなく、気づきの機会を与える

佐藤　私たち教師には、探究学習のプロセスの中でヒーローやヒロインが交替するチャンスをつくることが求められると思います。探究学習における教師のあり方として、「伴走」という言葉がよく使われます。私にとって、これまでの伴走は、思い思いの方向にそれぞれのペースで進んでいく生徒を見守り、求められた時に助言などを行うというものでした。しかし、今回のゼミの活動を通して、探究学習における教師の伴走とは、生徒が活動の中で学びや気づきと出合えたり、自分の考えを整理し、意思決定したりする機会を意図的につくることだと考えるようになりました。その象徴的な例が、柏木さんにも協力してもらった社会人アドバイザーによる企画書の添削です。

柏木　企画書の添削では、私を始めとする社会人との対話を通して、自分の考えを整理したことで、その後の活動に没頭できた生徒がたくさんいました。

佐藤　社会人アドバイザーと対話する中で、生徒は自分たちに足りないものが分かり、今後の活動の見通しを立てることができたのだと思います。企画書の添削を経て、ほかのグループの企画に参画した生徒もいましたが、それも立派な意思決定だと思います。活躍する生徒を教師が入れ替えるのではなく、生徒自らが新しいヒーロー、ヒロインとして立ち上がるきっかけをいかにつくるか……。私にとって、これからの探究学習を考える重要な問いが見つかりました。

柏木　活躍する生徒が入れ替われば、当然、活動が停滞、失速する生徒も現れます。最終的にほかのグループに合流した佐藤さんは、元のメンバーに遠慮して、主体的に活動できなくなったと振り返っていました。

佐藤　佐藤さんや浅沼さんは、「自分たちが経験した停滞や苦しみは、意味があるものだと思う」と私に話してくれました。探究学習で変わりたい、成長したいと考えた２人の願いは、見事に実現しました。

柏木　悩み、苦しんだ探究学習での経験は、それぞれの生徒の人生で価値あるものとして輝くはずです。

遠野高校の佐藤紘大先生と純心女子高校の槌本六秀先生が、生徒主体の探究学習をテーマに語り合いました。その模様を取材したウェブオリジナル記事を、ぜひご覧ください（右記の２次元コードを読み込み、またはクリックしてアクセス）。 VIEWnext ONLINE ▶

長崎県・私立純心中学校・純心女子高校
主体的に学ぶ授業とは？ 生徒と教師が新しい授業を追究

生徒が設定した課題

「先生と生徒の対話による新しい授業」

2021年秋、純心女子高校の2年生（当時）の深堀純香さん、白濱桃香さん、橋本由布子さんの3人が、探究学習のテーマとして「主体的な学び」に関心を持ったのは、自由教育に取り組む、ある私立の小・中学校の校長に話を聞いたことがきっかけだった。

「先生と児童・生徒が話し合って学習内容を決めているその学校では、生徒はとても主体的に学習に取り組んでいると聞きました。私たちは、授業で先生の話を聞き、先生の板書をノートに写し、先生から与えられた課題をこなすのが学習だと思っていました。それは主体的な学びなのだろうか、主体的な学びとはどのようなものなのだろうかと考えたのです」（深堀さん）

3人の心の中には、探究学習を担当する槌本六秀先生にかけられた、「調べ学習で終わらせず、分かったことを基に、何か行動を起こしてほしい」という言葉があった。自分たちが選んだ「教育」という領域は、高校生が当事者として行動を起こしやすいものだ。3人は、「先生と生徒の対話による新しい授業」を課題として設定し、様々な教育実践の研究と並行して、自分たちの授業を変えるための行動を始めた。

新しい授業を考えるにあたってヒントにしたのが、槌本先生の化学の授業だ。先生は授業で、「君たちが主体となって、教師を活用してほしい」と、生徒に呼びかけていた。

「化学の授業は、生徒が自学では分からなかっ

純心女子高校の探究学習

今回取材した生徒が所属する国公立大学進学希望者クラスの探究学習は、教育、福祉、環境などの領域別の班に分かれ、校内外の人への調査や生徒間での話し合いを通して、探究学習として取り組む課題を設定する。調べ学習で終わらない実践型の探究学習を目指しており、「障がい者と健常者の関係をアップデートする」を目標に、特別支援学校の生徒と協働でワークショップを実施した班もあった。

お話を伺った**生徒**の皆さん

小島麻由美さん（2年生）

木須さくらさん（2年生）

深堀純香さん（3年生）

橋本由布子さん（3年生）

白濱桃香さん（3年生）

※プロフィールは、2023年3月時点のものです。

たところをグループで話し合い、それでも解決できなかったことを、先生に説明してもらうという進め方でした。他の科目の授業も化学と同じ進め方ができるとは考えていませんでしたが、生徒の学習上の課題を授業の軸にするという点は参考にしようと思いました」（白濱さん）

3人は、数人の教師に、「先生と生徒の対話による新しい授業」を探究学習で取り組む課題として設定したことを説明し、授業で学習することや取り組むことを、教師と生徒が話し合って決める試みを提案した。3人の話に教師たちは驚きながらも、生徒の学びの意欲を喚起し、自身の授業改善にも役立つのであればと理解を示した。早速3人は、各科目でどんな学びを望むのかを他の生徒からヒアリングし、その結果を整理して教師に伝えた。

だが、試みは失敗した。他の生徒からの声は、「話し合いの時間を増やしてほしい」「クイズ形式で要点を確認する時間を設けてほしい」といった、表面的な要望に終始したからだ。

「私たちの要望を踏まえた授業を、実際に先生方にしてもらいましたが、今までの授業との違いは感じられませんでした。生徒からは、『小テストの問題数が多すぎるので半分にしてほしい』という要望もありましたが、先生に相談したところ、『大学入試を見据えて問題数を設定しています』と言われてしまいました。先生方が考えた授業のねらいなどを理解しないまま、表面的な要望を伝えることは対話ではないし、そうした要望でつくられた授業からは主体的な学びは生まれないと思いました」（深堀さん）

新たな問題も浮かび上がった。それは、授業に対する「責任」は誰にあるのかだ。新しい授業の形を提案し、実際に授業を行ってもらい、その成果や反省を次の授業に生かそうと考えた3人は、「複数回にわたって、私たちに授業の内容を組み立てさせてほしい」と、古典の担当教師に願い出た。それに対してその教師は、「あなたたちに対して私は責任があるから、何回も授業を任せることはできない」と答えた。

「その先生が言った『責任』という言葉が引っかかりました。授業で分かったこと、分からなかったことを生徒が教師に伝えて、次の授業のあり方を一緒に考えようとするならば、授業の責任は先生だけではなく、生徒にもあるのではないか……。主体的に学ぶ授業の責任の所在について考え込んでしまいました」（橋本さん）

22年度になって、「先生と生徒の対話による新しい授業」という課題に、2人の新2年生が参画した。木須（きす）さくらさんと小島麻由美さんだ。木須さんは、先輩の取り組みを知り、授業の不満を教師だけにぶつけてきた自分を変えたいと考えた。そして、英語の担当教師に、自分がこの課題を選んだことを伝え、「よりよい授業のあり方を先生と話し合いたい」と申し出た。

「先生は私の申し出に驚いていましたが、怒

「もしも、あの時私が……」生徒の探究は今も私の中にある

松尾まりこ先生（国語科）

「主体的な学びについて考えるために、自分たちで授業をつくりたい」という申し出を、私は「教師としての責任がある」と断りました。「あの時、一緒に授業をつくっていたらどうなったのだろう」と、今も考えます。生徒が考えた授業であっても、そこに教師である私がいれば、「責任」を果たせていたのかもしれません。3人の取り組みは、私にとっても忘れられないものになりました。

自分なりの答えを求める生徒に、教師としても影響を受けた

百岳（ひゃくたけ）真吾先生（地理歴史・公民科）

探究学習では、生徒は答えが1つではない課題に取り組みますが、彼女たちからは、何とかして自分なりの答えを見いだそうとする意気込みを感じました。彼女たちと授業のあり方について話し合い、そして彼女たちがもがきながら考えている姿を見て、私の中で、生徒が主体的に、より深く学ぶ授業を追究したいという気持ちが、今まで以上に高まりました。

りませんでした。それどころか、『授業のことを大切に考えてくれていたんだね。一緒に頑張ろう』とまで言ってくれました」

2人は、他の生徒にも呼びかけ、これまでの英語の授業のよいところ、改善してほしいところ、授業を通じて身につけたい力などを話し合った。だが、ここでも予想外の事態が起きた。

『今のままの授業でよいのに、なぜ、そんなことを話し合うの？』などと、私たちの取り組みに反対する意見が出てきたのです。自分がよいと思ったからといって、それが必ずしもほかの人にも受け入れられるとは限らないという現実の厳しさを痛感しました」（小島さん）

予想外の事態に、2人はショックを受けた。

「今の授業を変えたくないと言う人のことは気にせず、自分が信じることをやっていこうと思いましたが、次第にクラスの人たちとの溝が大きくなり、学校に行くのも嫌になってきてしまいました。でも、この課題に取り組んできた3人の先輩たちにも相談しながら考えるうちに、私たちの取り組みに反対する人にも、その人なりの理由があるのだと考えるようになったのです。他者の考えを自分と同じ考えに変えるのではなく、考えの違う個が協働して幸せになれるような場をつくることが必要なのだと、私の考えが変わりました」（木須さん）

教師や他の生徒との対話を通して、授業に対する見方は確かに深まってきたと感じる

5人だが、新しい授業がどのようなものなのかはまだ見えてない。

「先生方と話をする中で、先生は、『生徒にこうなってほしい』という姿から逆算して授業をしているけれど、私たちの現状と離れすぎてしまうことがあると感じました。自分の現状と距離のある授業だと、先生の話を聞いて、板書を写すだけになってしまいます。でも、授業で自分が学ぶべきことをよく理解していたら、授業の受け方は変わると思うのです。生徒が自分の学習上の課題を理解し、先生と共有していくことで、誰にとってもちょうどよい距離感の授業になるのではないか。だとしたら、そうした授業はどうすれば実現できるのか……。それを今考えています」（白濱さん）

一方、授業の責任や考えの違う個との協働など、当初想定していなかった問題は現在も解決されていない。

「確かに、新しい授業の形を考える過程で、次々と問題が浮かび上がってきましたが、それは調べ学習で終わらせず、分かったことを基に行動を起こしたからこそ生じたものですし、新たな問題にも向き合えているのは、自分たちが成長できているからだと思います。友人に探究学習のことを話したら、『先生と一緒に授業を変えるだなんて考えたこともなかった』と言われました。私も、自分たちがそんなことを考えられたことに驚いています」（橋本さん）

高校生は、周囲との衝突も成長の機会にできる

田中一彦先生（英語科）

木須さんと小島さんとは、授業についてというよりも、教育のあり方についてたくさん話をしました。クラスの生徒と衝突した経験を通じて、考えの異なる他者を受容できるようになったと語る2人の言葉を聞いて、高校生の成長はすごいなと感じました。私は自分の授業が講義型だとは思っていませんでしたが、生徒はそう思っていたことが分かりました。2人と話したことで、私も、もっと進化する必要があるのだと気がつきました。

●学校概要

設立　1935（昭和10）年
形態　全日制／普通科／女子校
生徒数　1学年（高校）約150人
2022年度入試合格実績（現浪計）　国公立大は、筑波大、千葉大、埼玉大、横浜国立大、高知大、佐賀大、長崎大、宮崎大、北九州市立大、長崎県立大などに18人が合格。私立大は、津田塾大、東洋大、南山大、ノートルダム清心女子大、西南学院大、長崎純心大などに延べ96人が合格。

担当教師と考える「探究学習における主体性」

長崎県・私立純心中学校・純心女子高校
3学年担任
槌本六秀 つちもと・むつひで
教師歴 26 年。同校に赴任して 27 年目。理科。

VIEW next編集部 統括責任者
柏木 崇 かしわぎ・たかし

自分事のテーマだから粘り強く取り組めた

柏木　自分は主体的に授業に臨んでいるのだろうかと考える中で、教師と一緒に授業をつくっていこうと考え、実際に提案・実行した生徒の行動力にはとても驚かされました。私自身の高校時代を思い出すと、正直、先生に言われたことをこなすだけで、主体的に学ぶことができていなかった授業もありましたが、そのような授業を自分の力で変えていこうなどと考えたことは、一度もありませんでした。

槌本　５人の取り組みを知った人たちは、柏木さんのように驚きます。でも、生徒たちはいたって普通の高校生で、決して我を通すタイプではありません。

柏木　それなのに、先生に自分たちの考えを説明し、時にクラスメートと衝突しながら探究学習を進めていったのですね。生徒が理想の授業を考える上でヒントになったのが、槌本先生の化学の授業だったそうですが、探究学習に取り組む生徒からは、相談事も多かったのではないでしょうか。

槌本　何度か相談に来たので、丁寧に話を聞き、「それはなぜ？」「あなたの気持ちは？」などと尋ねました。ただ、具体的なアドバイスは一切しませんでした。それでも、生徒たちの主体性が高く維持されていたのは、主体的に学ぶ授業の実現が、生徒たちにとって避けては通れない自分自身の課題だったからだと思います。柏木さんは、「主体的に学べていなかった授業もあったけれど、授業を自分の手で変えようと思わなかった」と言いました。私も、高校時代は同じでした。その理由は、私たちは主体的に学んではいなかったけれども、家庭学習などで補えば、学習内容を理解できたから、つまり、自分の困り事ではなかったからだと思うのです。高校生が授業をつくるという発想も、当時の自分にはありませんでした。今回の生徒にとっては、粘り強く取り組む価値があるテーマだったのでしょう。

日々の教師の問いかけを通して、生徒は自分と向き合う

槌本　生徒が主体的に探究学習に取り組んだ理由は、もう１つあると思っています。それは、高校入学時から自分と向き合う時間がたくさんあったからかもしれません。３人の３年生には、私は担任として３年間かかわってきましたが、日々いろいろな問いを投げかけてきました。１年次の４月、どんな高校生活を送りたいか、生徒たちに聞いたところ、何人かの生徒が、「自分らしい高校生活」と答えました。私が「自分らしいって、どういうこと？」と尋ねると、生徒たちは思い思いの答えを口にしました。しかし、さらに問いを重ねると、生徒たちは「自分らしさ」が何なのか分からなくなったのです。その時、生徒にとって「自分らしさ」は、３年間を通じた探究課題になったのだと思います。以降、私は学校生活の様々な場面で、「あなたはどう考えているの？」「どうしたいの？」と尋ねました。柏木さんが取材に来た際も、生徒に「今日、ベネッセの柏木さんが来るけど、どうする？」と聞きました。

柏木　はい。槌本先生を訪ねると、いつも多くの生徒さんに囲まれ、様々なテーマで私が逆取材されます。

槌本　私が「どう思う？」「どうしたい？」と尋ねる度に、生徒は自分に向き合っていたのだと思います。「先生と生徒の対話による新しい授業」を課題として設定した生徒たちも、自分と向き合った末にこの課題にたどり着き、自分が取り組む価値を理解していたからこそ、粘り強く取り組めたのだと思います。探究学習を通して授業を変えたいという気持ち以上に、自分を変えたいという思いがあったのではないでしょうか。

柏木　槌本先生から日々投げかけられる問いを通じて、生徒は自分と向き合ってきたからこそ、探究学習にも主体的に取り組めたのでしょうね。豊かな探究学習を実現する土壌は、豊かな学校の日常の中で育まれるものなのだと、改めて実感しました。

純心女子高校の槌本六秀先生と遠野高校の佐藤紘大先生が、生徒主体の探究学習をテーマに語り合いました。その模様を取材したウェブオリジナル記事を、ぜひご覧ください（右記の2次元コードを読み込み、またはクリックしてアクセス）。 VIEWnext ONLINE ▶

青森県教育庁

1人1課題に取り組む「あおもり創造学」で、地域課題を自分事として捉える

青森県は、持続可能な地域を創造する人材の育成に向け、生徒が地域課題に取り組む探究学習「あおもり創造学」を創設。生徒の主体性を引き出すために1人1課題の形とし、校内体制の確立を支援する研修も実施している。

教師の役割は、生徒が困った時に積極的に寄り添う「伴走」

高卒就職者の約4割が県外に就職し、県外大学等への進学率が約3割に上る青森県。県の人口減少が続く中、県の未来を担う人材を育成する施策として、青森県教育庁（以下、教育庁）は、2022年度、「総合的な探究の時間」等において、すべての生徒が取り組む「あおもり創造学」を創設した（**図1**）。それは、生徒が高校の所在地や自身の居住地について理解を深め、自分の関心に基づいて課題を設定し、地域資源を活用したり、地域人材と連携したりしながら取り組む探究学習だ。

特徴は、1人1課題に取り組み、地域と連携する活動とした点だ。生徒にとって身近な地域をテーマにすることで、生徒が課題を自分事として捉えやすくなり、日常生活において情報を集めたり、授業外でも活動したりと、調べ学習にとどまらない、主体的な探究学習が期待できると考えた。また、個人による活動とすれば、生徒一人ひとりの学習評価も担保できる。

社会では、自分1人ではなく、関係者と連携し、議論しながら課題に取り組むことがほとんどだ。高校での探究学習において、他者と連携して課題に取り組む経験をすることができるよう、生徒が学校外で活動するための経費として予算も確保した。

生徒が課題を自分事として捉えられるようにするためには、教師の教育観の転換も重要だと、同事業担当の教育庁学校教育課高等学校指導グループの伴一聡（かずとし）指導主事は語る。

「生徒も教師も発表などの『まとめ・表現』に目を向けがちですが、探究学習では、情報を整理・分析し、時には他者と協働する中で、自分なりの納得解を出すプロセスこそが重要です。例えば、生徒が課題の設定に困っていたり、探究の途中で関心が変わったりした際に、生徒が次のアクションを見いだせるように、生徒の関心事に関連する情報を収集する具体的な方法を提示するなど、教師の寄り添う姿勢が必要です。教員研修では、先進校の事例や質疑応答などを通じて、指導のノウハウに加え、生徒の探究に伴走し、生徒が困った時に積極的にかかわるといった探究学習における教師の役割も伝えています」

学校教育課
高等学校指導グループ
指導主事
伴 一聡
ばん・かずとし

●自治体概要
高校数　県立54校、私立17校
高校生徒数　約3万人

研修を年4回実施し、悩みの解決につながる情報を提供

各校が「あおもり創造学」を推進できるよう、22年度、教育庁は次の取り組みを行った。

◎各校の担当者対象の研修協議会

校内の推進体制を確立できるよ

※プロフィールは、2023年3月時点のものです。

う、各校に「あおもり創造学総括担当教員」（以下、担当教員）を置き、担当教員対象の教員研修協議会を4回実施した（**図2**）。県の地域課題に関する施策や、高校が利用できる支援事業の説明などを行い、生徒が設定する課題や経費の確保の方法を、担当教員がイメージできるようにした。また、担当教員に研修内容を自校の教師に報告・共有するように伝え、各校において研修内容を共有する場を設けられるよう、各校に依頼した。

担当教員に好評だったのは、県内外の探究学習の先進校の実践発表と、大学教員による思考ツールの活用実践に関する講演だった。

「先進校の先生には、生徒に伴走するとは具体的にどうすることか、校内体制をどのように築いたかなどについて話していただきました。思考ツールの活用法では、大学の先生に、青森県の課題を題材にして、実際に思考ツールを活用しながら説明していただきました。課題設定の際に思考ツールをどう使えば、情報の整理や分析ができるようになるのかがイメージできたといった声が担当教員から聞かれました」

教員研修協議会では、県内6地域ごとの分科会も行った（**写真**）。地域内の普通科や専門学科、定時制、通信制の教師が、地域の課題や生徒が設定した課題を共有し、それらに取り組む際に教師ができる支援について助言し合った。

「専門学科は課題研究での指導経験が豊富ですから、普通科の教師にとって参考になる点が多々あります。分科会で教師同士が関係を築き、普段から情報交換や相談をし合うなど、よい実践を横展開しやすくしました」

図1 「あおもり創造学」事業概要

◉「あおもり創造学」とは

高校生活の中で、地域資源や人財を活用して、総合的な探究の時間等において、高校の所在地域及び自身の居住地域等について理解を深める学習。地域と協力しながら生徒一人ひとりの「ふるさとあおもり」への愛着や誇り、夢を抱き、未来に向かって挑戦する意欲の醸成に取り組み、その成果を小・中学校及び地域に発信する。

◉主な取り組み

- 地域や外部と連携するためのバス使用料等の予算を確保し、2022・23年度は推進校20校、2023・24年度は推進校以外に配分。
- 各校に「あおもり創造学総括担当教員」を配置。研修を年4回実施。
- 全校の実践を一元で発信するウェブサイト（P.16 図3）を開設。
- 県で成果発表会を実施。各校は、成果をまとめた動画を製作・配信。

青森県では、人材を「人の財（たから）」と捉え、「人財」と表記している。

※青森県教育庁の提供資料を基に編集部で作成。

図2 「あおもり創造学及び総合的な探究の時間」教員研修協議会 概要

実施頻度・時期　年4回（5月、7月、9月、11月）
実施時間　各回とも10時00分～15時30分
参加者　各校のあおもり創造学総括担当教員1人（複数参加可）
各回の内容　各回とも、「あおもり創造学」の取り組みに関する質疑応答と、県内6地域のグループ別の情報交換・分科会も実施

回	テーマ	主な内容
第1回	校内体制の構築	・「あおもり創造学」の事業説明・質疑応答 ・地域課題に関する県の施策、及び高校関係事業の説明（発表者：知事部局と教育庁他課の担当者） ・県内先進校の実践発表（テーマ：高校生が考える人口減少対策プログラム）
第2回	他機関とのネットワークづくり	・大学教員の講演・質疑応答（テーマ：外部機関と連携した探究学習、ネットワークづくり） ・県内10大学・短大による地域連携・高大接続に関する情報提供
第3回	ICTの活用、キャリア教育の充実	・地域課題に関する県の施策、及び高校関係事業の説明（発表者：知事部局と教育庁他課の担当者） ・岩手県の先進校の教師による講演（テーマ：担当者が1人で悩まずに学校全体で取り組む探究学習の体制づくり）
第4回	効果的な情報発信	・大学教員の講演・質疑応答（テーマ：探究学習における地域課題の捉え方、プロジェクト形成のコツ）

※青森県教育庁の提供資料を基に編集部で作成。

写真　教員研修協議会では毎回、県内6地域ごとに担当教員が集まる分科会も実施。地域特有の状況が分かる教師同士で活発な情報交換が行われた。

ウェブサイトや成果発表会で学校内外に実践をアピール

◎ウェブサイトで成果を一元発信

教育庁は、全校の実践と成果を発信する「あおもり創造学」のウェブサイトを開設した（**図3**）。各校の魅力の訴求や外部の連携先への成果報告、保護者への探究学習の周知など、様々な効果をねらっている。特に、各校がそれぞれの実践を共有する中で協働研究に発展することや、小・中学生が高校での探究学習の情報を得て、現在の学びが高校での学びにどうつながるかをイメージして進路選択に役立てることを期待している。

◎県主催の成果発表会の実施

23年1月、「あおもり創造学」の成果発表会を、対面とオンラインの併用で開催した。参加した26校の生徒は堂々と発表し、聴衆の生徒も積極的に質問した。「あおもり創造学の取り組みの改善」をテーマにした分科会も行い、その内容は会場全体で共有した。

伴指導主事は、同事業の成果を象徴する発表に、定時制高校の生徒が取り組んだ「地域連携と防災意識の向上」を挙げた。その高校の生徒たちは、学校が津波による浸水区域に位置することから、町民と防災について話し合い、一緒に町を歩いて避難経路を確認するとともに、防災訓練も行った。その実践は、22年10月に新潟県で開催された「世界津波の日　高校生サミット」でも発表された。

「身近なことに関する課題意識を発端に情報を集め、分析し、行動に移して、その成果を世界に発信したその生徒は、世界に目を向けるようになっていました。本事業の意義を強く感じた事例です」

図3「あおもり創造学」のウェブサイト

各校の「あおもり創造学」に関する最新情報をまとめて紹介

各校が取り組む主な課題を紹介。各校のウェブサイトにリンクを張っている

下記 URL、または「あおもり創造学」で検索し、アクセスしてください。
https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/kyoiku/e-gakyo/aomorisouzougaku.html
※青森県教育庁の提供資料を基に編集部で作成。

カリ・マネを推進し、持続可能な探究学習の実現を

現在までの成果を、伴指導主事は次のように語る。

「教員研修協議会では、回を重ねる度に、教師は自校の課題を開示して指導主事や他校の先生方に助言を求めるようになるなど、意欲的になっていました。実施1年目としては、十分な手応えがあります。一方で、教員研修協議会の参加者が毎回異なるなど、校内体制が確立されていない様子がうかがえた学校には、こまめに連絡し、重点的な支援を心がけました」

今後の課題は、「総合的な探究の時間」を軸にしたカリキュラム・マネジメントの実現を支援することだ。生徒が主体的に探究学習に取り組めば、活動は「総合的な探究の時間」の枠に収まらなくなり、各教科の学習や学校行事、外部との連携が一層重要になる。すなわち、各校がカリキュラム・マネジメントの視点で教育活動を見直すことが求められ、教師の負担が軽減されて、事業終了後も持続可能な探究学習になると考えている。

小・中学校と高校の探究学習の連続性も課題に挙げる。多くの小・中学校では「総合的な学習の時間」で地域学習を行っており、個人差はあれど、生徒は高校入学時に地域への関心を持っている。市町村教育委員会との連携やキャリア・パスポートの活用によって生徒の実態をつかんだ上で活動ができる仕組みづくりも検討していく。

「地域の課題に取り組む経験は、生徒の社会貢献意識を高め、青森県のみならず、日本の発展に寄与するでしょう。何より、地に足のついた探究学習に取り組むことで、学びが深まり、自身のあり方・生き方もより明確になるはずです。現場の教師や生徒が一層主体的に活動できるよう、これからも支援を続けていきます」

福井県教育庁

生徒が「念い」を社会に発信する、全国規模の「プレゼン甲子園」を開催

福井県は、学校間で連携して探究学習を行う仕組みづくりや、中学校での探究学習を評価する高校入試の導入、そして生徒が「念い」を伝える「全国高校生プレゼン甲子園」の開催などで、生徒主体の探究学習を支援している。

校内体制の構築と、各校の実践の横展開を支援

福井県教育庁（以下、教育庁）は、県立高校の特色化の1つとして探究学習を掲げ、2022年度までに県立高校8校に探究系学科を設置するとともに、全校の探究学習の推進を支援する施策を講じている。教育庁高校教育課の渡邉本樹参事は、そのねらいをこう語る。

「本県では4校がSSH（＊）に指定されており、各校の生徒は、探究学習に意欲的に取り組み、全国規模の発表会に出場して成果も上げています。そうした生徒を支援している各校のノウハウを県内の全校に広め、県全体で探究学習を推進する体制を整えました」

22年度に講じた主な施策は、次の通りだ（P.18図1）。

◎各校に探究学習担当者を配置

校内の探究学習の推進を中心的に担う校務分掌を設置し、探究学習担当者として、探究リーダー・ICT活用リーダー各1人、教科学習リーダー5教科各1人を配置するよう各校に依頼した。

◎探究学習コーディネーターの巡回

退職教員2人を「探究学習コーディネーター」として配置。各校を訪問し、校内の探究学習を推進する体制の確立や、各校の実践の紹介など、探究学習の推進を支援している。各校の探究学習担当者をつなげる役割も担う。

◎教員研修を年3回実施

各校の探究学習担当者を対象とした教員研修を、22年度は3回実施。例えば、23年1月に行った研修には、全校の探究学習担当者が参加し、次年度の探究学習の年間計画を考える機会とした。

◎全校の探究学習担当者が交流する場をオンライン上に設置

全校の探究学習担当者がオンライン上で交流する場を設置した。教員研修で各校の担当者同士の交流が深まるにつれ、交流の場の書き込みが増えていき、22年度末には、次年度の「総合的な探究の時間」の年間計画についてアドバイスし合うやり取りも見られた。

学校を超えた連携が活発化。互いに刺激し合う生徒たち

以上の施策によって、学校間の連携が活発化している。例えば、県立高校5校が校則や校内ルール

高校教育課
副部長（高校教育）
山﨑良成
やまざき・よしなり

高校教育課
参事（大学進学サポート）
西東一彦
さいとう・かずひこ

高校教育課
参事（授業力向上）
渡邉本樹
わたなべ・もとき

高校教育課
指導主事
家根谷直登
やねや・なおと

●自治体概要

高校数　県立25校、私立7校
高校生徒数　約2万人

＊ 文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール」の略。

※プロフィールは、2023年3月時点のものです。

図1 探究学習の推進に関する主な施策（2022年度）

◉校内体制の整備

各校に、探究学習を推進する校務分掌を設置し、探究学習担当者として、探究リーダー1人、ICT活用リーダー1人、教科学習リーダー5教科各1人を配置。

◉探究学習コーディネーターが各校を巡回

探究学習コーディネーター2人（退職教員）を配置し、各校を巡回して支援。ほかに、大学教員の探究学習アドバイザーも配置。

◉教員研修を年3回実施

探究学習担当者を対象にした教員研修を年3回実施。

実施月	テーマ	主な内容
8月	観点別学習状況の評価	• 各校の探究リーダーが4グループに分かれ、校内体制づくりなどを議論 • 県内の先進校2校の実践発表 • 仁愛大学の西出和彦教授の講演
1月	今年度の振り返り、次年度の計画	• 國學院大學の田村学教授の講演（探究学習における教師の役割と実践など） • 各校の探究リーダー、ICT活用リーダー、教科学習リーダーごとの分科会で情報共有
3月	生徒の変容、評価、校内体制	• 各校の探究リーダーが3人ずつのグループに分かれて情報共有 • 研修内容についてオンラインでの事前説明会を実施 • 事前事後アンケートを実施し、結果を共有

◉高校間の情報共有を支援

Googleクラスルームに、探究学習担当者の交流の場を設置。年度当初には、すべての学校が、生徒の探究学習のテーマ一覧を、個人情報を除外した形で共有した。

◉高校入試の改革

探究系学科を設置する高校が、探究系学科の入学者選抜で、中学校までの探究学習を評価する方法を独自に設定した特色選抜を実施（下表は一例）。

テーマ	特色選抜の内容
高志（こし）高校	• 事前課題　①自分が関心を持つ内容の新聞記事等を選び、自分の考えを探究的観点でまとめる　②中学校での探究学習または英語に関する取り組みをまとめる • 口頭試問、面接
武生（たけふ）高校	• 試験会場で出された課題について、各自内容を検討し、ポスターなどを作成してプレゼンテーションを行う • 適性検査

※福井県教育庁の提供資料を基に編集部で作成。

をテーマにした合同ワークショップを開催し、各校の実践を踏まえて、よりよい校則や校内ルールのあり方を議論した。また、課題研究のアドバイザーを務める大学教員の仲介で、県立高校2校の研究グループが学習会を開き、協働して学びを進めている。2校ともに「地域の地震」を研究テーマにしているが、それぞれ「地震の予知」、「活断層」と、題材が異なるため、互いに違う視点の意見を得る機会となり、より探究が深まっている。

「探究学習の成果を学校外で発信し、他者から意見を聞くことは、取り組みを客観視して改善したり、新たな発想が生まれたりと、次の一歩につながります。その過程において、課題をますます自分事として捉えられるようになり、それが主体的な探究学習につながると考えています」（渡邉参事）

また、探究学習における中高連携を図ろうと、探究系学科を設置する高校が、高校入試において、中学校で取り組んだ探究学習を評価する特色選抜を実施している（**図1**）。高校教育課の山﨑良成副部長は、その意図をこう語る。

「中学校で取り組んだ探究学習の成果を、高校での探究学習に結びつけることで、自分の興味をさらに掘り下げてほしいという思いがあります。また、高校が探究学習を重視している姿勢を、高校入試において明確に打ち出せば、全中学校に、自分のあり方・生き方を追究するような探究学習が広まると考えました。探究学習は自分にかかわる楽しい学びだと中学生が感じられるようになることで、県全体で生徒主体の探究学習が実現することを期待しています」

自分の「念（おも）い」を持つまでの過程こそが、主体的な探究に

生徒が探究学習の成果を主体的に発信する場として、教育庁は「全国高校生プレゼン甲子園」を開催している。「テーマについて深く考察した上で、論理的思考力、表現力、創造力を発揮して、自分の考えや念（おも）いを伝える総合的なプレゼンテーション能力の向上を図る」ことを目的とし、一般社団法人プレゼンテーション協会の代表理事が同県出身であることが縁で始まった。22年度は34都道府県から441チームが参加した全国規模の大会で、23年度に第3回を迎える（**図2**）。高校教育課の西東（さいとう）一彦参事は、「念い」とした意図を次のように語る。

「代表理事の言葉を借りて言えば、相手の心に響くプレゼンは、確固たる『信念』があってこそできるものです。その信念を持つためには、どんな課題を設定し、どのような情報を収集して、どう分析するか。そうしたプレゼンに至るまでの過程が重要であり、それがまさに主体的な探究になると考えています。決勝大会では、プレゼン5分間に対して、質疑応答を10分間とし、出場者の念いを丁寧に見ています」

いくつかの応募校では、自校の探究学習のねらいに応じてプレゼン甲子園を年間計画に組み込んでいる。1年次に組み込んでいる学校は、探究サイクルを回す練習の機会の1つとしている。2・3年次に組み込んでいる学校は、1年間の探究学習の成果を発表する場として応募させたり、学年で代表者を決め、取材や調査を追加してプレゼン内容に磨きをかけた上で大会に臨んだりしている。

大会での客観的な評価が次の一歩につながる

22年度の決勝大会では、全国を勝ち抜いた生徒の熱いプレゼンが繰り広げられた(**写真**)。「どのチームも全身を使って伝えようとする姿に、私も熱くなりました」、「持続可能な未来について真剣に考え、行動している仲間に出会えてよかったです」といった声が出場者から聞かれ、互いのプレゼンに感想を述べ合う光景が見られた。

自分が興味を持って主体的に突き詰めた探究学習は、生徒の様々な自己実現につながっている。決勝大会でのプレゼンが協賛企業の目に留まり、米粉ストローの商品化が検討されている。ある生徒は、決勝大会の経験から、地元への貢献の思いを強くし、福井大学国際地域学部の総合型選抜で探究学習の実績をアピールして合格した。プレゼン甲子園事務局担当の家根谷直登(やねやなおと)指導主事は、こう語る。

「向き合う問いの正解が1つではなく、成果も実感しづらいのが探究学習です。本大会が、自分の思いが観客に伝わった、あるいは伝わらなかったと、生徒が実感できる場となるよう、運営しています」

教育庁は、今後も様々な形で探究学習の推進を支援していく。

「探究学習は、多くの人の幸せにつながる学びであり、未来に向かって期待感を持って進める学びです。生徒も教師も、探究学習を自分事にするとともに、社会をよりよくしたいという思いを持って主体的に取り組んでいけるような機会を、これからも提供したいと考えています」(西東参事)

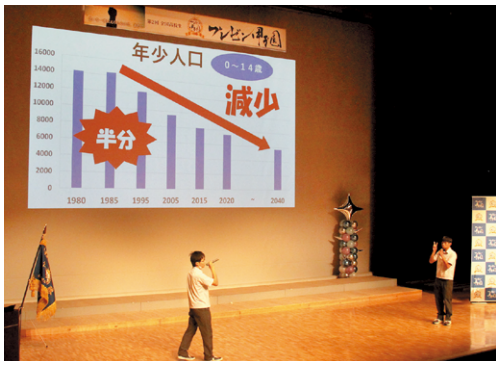


写真 プレゼン甲子園の決勝大会では、会場を巻き込むパフォーマンスを交えてプレゼンテーションをするチームもあった。決勝大会の動画は、公式ウェブサイトで公開中。

図2 2023年度「第3回 全国高校生プレゼン甲子園」実施要項

◉テーマ(予選・決勝共通)

「Well-being(ウェルビーイング)と未来社会──幸せとは何か──」
個人の幸せの追求にとどまらず、広く、地域社会、若しくは日本や世界全体のWell-beingを実現するための具体的なアクションを提案する

◉応募資格 高校生1チーム3人まで(個人でも可)

◉審査方法・日程

1次審査:予選動画提出 5月26日(金)~6月7日(水)
2次審査:ブロック選抜(オンライン) 7月8日(土)~9日(日)
開催県を含む全国7地区に分け、予選動画についてオンラインによる質疑応答を実施
決勝大会:対面審査(会場・福井県) 8月19日(土)
各ブロックを勝ち抜いた10チームが、テーマに沿ったプレゼンと質疑応答を実施(プレゼン時間5分間)
※最優秀賞、優秀賞のほか、ブロック賞や学校奨励賞なども創設

◉過去の予選応募数

第1回 29都道府県85校409チーム(県内288、県外121)
第2回 34都道府県107校441チーム(県内300、県外141)

応募方法など、詳細は公式ウェブサイトをご確認ください。
下記URL、または右記2次元コードでアクセスできます。
https://presen.or.jp/presen_koshien/
全国高校生プレゼン甲子園 検索

※福井県教育庁の提供資料を基に編集部で作成。

探究のプロセスを見通しつつ、論理的・批判的に思考することができる「対話型論証モデル」で、探究の自走を図る

多くの高校の探究学習の支援・助言に携わる京都大学の松下佳代教授は、生徒が探究学習を自律的に進めるツールの1つとして、「対話型論証モデル」を提唱している。そのモデルを使って探究学習を進める大阪府・私立高槻中学校・高校では、生徒が自分で筋道を立てて考えを深める様子が見られるようになり、教師は個別支援がしやすくなったという。同モデルは、生徒主体の探究学習をどう支えているのか。松下教授と、高槻中学校・高校の教師、ティーチング・アシスタントに話を聞いた。

論理的思考力を働かせながら問いを結論に導く

――「対話型論証」について教えてください。

松下　対話型論証とは、「ある問題に対して、他者と対話しながら、根拠を持って主張を組み立て、結論を導く活動」のことです。それを図式化したのが「対話型論証モデル」で、トゥールミン・モデルなどを参考に作成しました（＊1）。

本モデルは、①問題、②主張、③事実・データ、④論拠、⑤対立意見、⑥反駁（はんばく）、⑦結論の7つの要素から成ります（**図1**）。まず大切なのは、①問題→②主張→⑦結論の縦の軸です（**図1緑枠**）。調べて分かったことがたくさんあっても、①問題が明確でないと②主張に結びつけられず、⑦結論として何が言えるかが曖昧になってしまうからです。

一方、横の軸も大切です。左側の部分は、一般に「三角ロジック」と呼ばれるものです（**図1赤枠**）。③事実・データを、④論拠によって解釈し、②主張を導きます。それを使って物事を捉えると、同じ事実・データでも、異なる論拠・理由づけをすれば、異なる主張になることもあるのが分かります。例えば、ルネサンスの名画「最後の晩餐」を基に、「ルネサンスは中世か近世か」を問いにした時、題材の宗教絵画に着目すると「中世」と言えますが、遠近法を用いている点は「近世」の特徴です（**図2**）。その2つの主張を合わせれば、ルネサンスが中世と近世の過渡期にあることが分かるわけです。

そのように、②主張、③事実・データ、④論拠を区別することで物事を論理的・批判的に捉えられるのが、三角ロジックのよさです。⑤対立意見も三角ロジックで構造化して捉えることで、相手の主張がよりよく理解でき、その上で、相手の主張のどこに問題があるかという⑥反駁が行いやすくなるでしょう。

京都大学大学院教育学研究科　教授
松下佳代　まつした・かよ
京都大学大学院教育学研究科博士後期課程学修認定退学。博士（教育学）。京都大学教育学部助手、同高等教育研究開発推進センター教授等を経て、2022年10月から現職。専門は、教育方法学、大学教育学。特に、能力、学習、評価をテーマに研究と実践支援を行う。著書に、『対話型論証による学びのデザイン　学校で身につけてほしいたった一つのこと』（勁草書房）、『対話型論証ですすめる探究ワーク』（共著、勁草書房）、『ディープ・アクティブラーニング』（勁草書房）など。

※プロフィールは、2023年3月時点のものです。

探究のプロセスと考え方をワークシートに示す

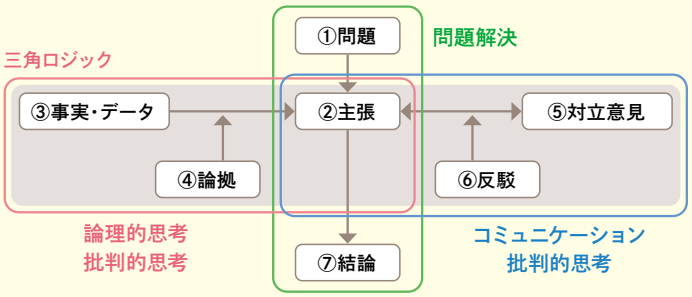
―対話型論証モデルを使うと、問題から結論までを論理的に考えやすくなることが分かりました。探究学習には、具体的にどう活用することができるのでしょうか。

松下 対話型論証モデルを、学習指導要領の解説（＊2）に示されている「探究における生徒の学習の姿」にあてはめると、①は「課題の設定」、②～⑥は「情報の収集」と「整理・分析」、⑦は「まとめ・表現」になります。そうした探究のプロセスとともに、どのように思考を働かせればよいかが示されているので、自分で探究学習を進められるようになっています。

前田 本校では、中学3年次から本格的に探究学習に取り組みますが、生徒はまず、対話型論証モデルを使って探究のプロセスや考え方を学びます。初めて探究学習に取り組む生徒も、次にすればよいことがイメージしやすいため、自ら考えて進めています。最初は、「事実・データ」と「論拠・理由づけ」の違いなどが分かりにくいようですが、生徒同士で「理由づけは正しいか」「客観性はあるか」などと対話を重ねるうちに、その違いなどを理解し、自分で探究を

図1 「対話型論証モデル」の基本要素

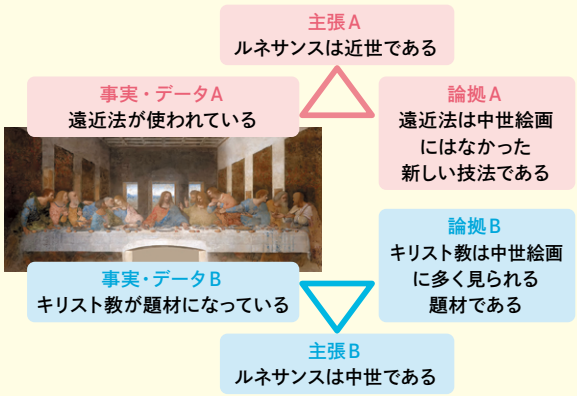
①**問題** ある対象や状況についての問題意識やその背景、そこから設定した問題（課題や問い）。
②**主張** 問題に対する特定の考え。事実・データと論拠によって支持され、対立意見への反駁によって強化される。
③**事実・データ** 主張を支える具体的な材料。
④**論拠** 事実・データを主張に結びつける土台となる理由。
⑤**対立意見** 設定した問題に対する自分とは対立する（少なくとも異なる）意見。対立意見にも、それを支える事実・データや論拠がある。
⑥**反駁** 対立意見に対し、自分の主張を擁護するための反論。
⑦**結論** 複数の主張を統合して得られる結論。設定した問題に対する答え。



※松下教授の提供資料を基に編集部で作成。

図2 「三角ロジック」の具体例

問い ルネサンスは中世か近世か



※松下教授の提供資料を基に編集部で作成。

大阪府・私立高槻中学校・高校 教頭（＊3）
前田秀樹 まえだ・ひでき
教職歴28年。同校に赴任して24年目。

●学校概要
設立 1940（昭和15）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数 1学年約270人
2022年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、東京大、京都大、大阪大、神戸大などに164人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ511人が合格。

大阪府・私立高槻中学校・高校 ティーチング・アシスタント
京都大学大学院教育学研究科博士後期課程
田中孝平 たなか・こうへい
同志社大学社会学部卒業。京都大学大学院教育学研究科修士課程修了。専門は、大学教育学。特に、高校の探究学習を通じた高大接続について、実践的・実証的に研究を行う。

＊1 トゥールミン, S.（2011）『議論の技法―トゥールミンモデルの原点―』（戸田山和久・福澤一吉訳）東京図書。
＊2 文部科学省「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総合的な探究の時間編」。
＊3 2023年4月から兵庫県・私立関西学院高等部に勤務。

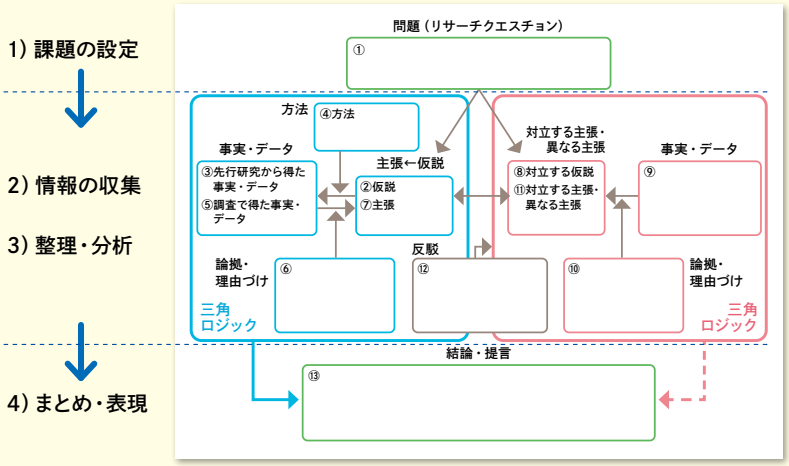
深めていけるようになります。

田中　高槻中学校・高校では、すべての生徒がクラウド上に保存されている対話型論証モデルのワークシート（**図3**）に問題や主張、調査の手続きや項目などを記入します。それぞれの構成要素が記入できれば、自分の達成状況を「Classi」（＊3）のポートフォリオにアップしています。そのため、各生徒がどんな問いを立て、何を調べているか、どこまで探究が進んでいるかが、即座に分かります。「この生徒にはこんな声をかけよう」、「この生徒は見守っていよう」などと、生徒個々に合った支援ができていると思います。

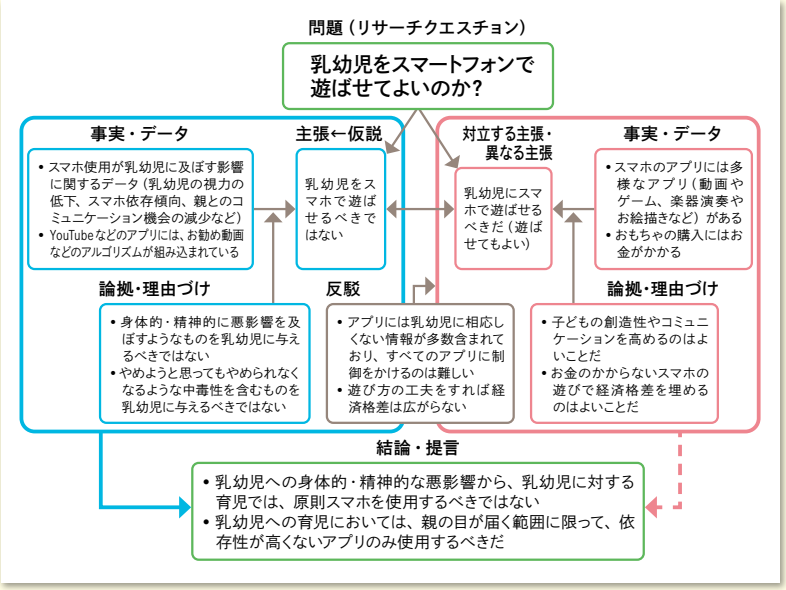
前田　探究学習は、テーマや進度が生徒それぞれで異なり、一人ひとりに適切な支援や評価を行うところに難しさがありますが、ワークシートをＩＣＴで共有することで、生徒の状況をタイムリーに把握し、個に応じた支援や形成的評価がしやすくなりました。

図3　高槻中学校・高校が活用するワークシートと、生徒の記入例

◉対話型論証モデルのワークシート



◉ワークシートの生徒の記入例



※高槻中学校・高校の提供資料を基に編集部で作成。

生徒自身が熱中できる「問い」が、主体性を発揮する原動力に

――モデルに縛られてしまい、かえって生徒の主体性が発揮されにくくはならないでしょうか。

松下　対話型論証モデルを使えば、探究学習のプロセスを目に見える形にしやすいため、確かに探究学習が形式的になる恐れはあります。ただ、前田先生がおっしゃったように、初めは教師の指示通りにワークシートを埋めたとしても、探究のサイクルを回すにつれて、本モデルが示す考え方を理解することができるようになります。

高槻中学校・高校では、先生方が本モデルのねらいを理解し、生徒の実態に応じて作り変えてこられました。**図3**は、自分の主張と対立意見のそれぞれの事実・データや論拠を対比させるため、対立する主張の側の三角ロジックも書き表したものです。仮説に関する事実・データを集める「方法」を示す欄も設け、探究の手順がより

＊3　株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。

考えやすくなっています。

田中 私が生徒を支援する中で重要だと感じたのが、「問い」の立て方です。問いへのこだわりが薄く、結論を出しやすい問題を設定していた生徒が一定数いました。振り返ったところ、自分が本当に探究したい問題を設定できなかったために、生徒は主体的に取り組めなかったのではないかと気づきました。生徒は、「探究学習は高尚な学び」と捉えていて、自分の内面から湧き出る疑問や違和感が探究の問いになると思っていないのかもしれません。例えば、地球温暖化など、よくある課題を探究しようと思っても、その課題の何が自分にとって疑問なのか、どこに違和感を覚えるのかがはっきりしなければ、その課題は自分事にならず、主体的に取り組むことができないのだと思います。

松下 高校生の探究学習は、自分は何に関心があるのか、自分の適性は何かを見つけることもねらいの1つです。身近な課題や小さな疑問を探究し、それによって気づきが得られるだけでも十分に意味があるはずです。結論が出なかったとしても、試行錯誤のプロセスを振り返り、どこで、なぜつまずいたのか、うまくいったポイントは何かを考える経験が、生徒の成長につながります。

前田 私も、探究学習はゴールだけを見ないことが大切だと思っています。生徒が主体的に探究学習に取り組むようにするには、自分が本当に探究したい問いを見つけ、自分なりの方法で答えにたどり着くプロセスが大切です。自分が面白いと思うことを追究することが学びになるという意識を、教師と生徒の双方が持つことが必要なのかもしれません。

松下 小学校や中学校でも、対話型論証モデルを活用して、子ども主体で探究学習を進めている学校があります。簡単な問いから始めて実践を重ねれば、三角ロジックも理解することができます。ウェブサイトでワークシートも公開していますので、ご活用いただければと思います（図4）。

図4 「対話型論証モデル」のウェブサイト

対話型論証モデルを用いた探究学習の進め方を解説しているウェブサイト。ワークシートなどのダウンロードが可能だ。
https://www.d-argument.net

探究学習を核にしたカリマネで、教科学習との連携を図る

―生徒主体の探究学習を実現する上で、何が必要であるとお考えですか。

前田 探究学習では、教師は生徒に具体的な助言をする必要はないと考えています。「事実をこう解釈しているけれど、本当にそう言えるのかな？」「ほかにどんなデータがあればよいと思う？」などと問いかけ、生徒が「これを調べよう」「こういう人に話を聞こう」などと、自分で考えて行動してこそ、探究は深まっていくからです。探究学習は生徒主体で進める学びであり、教師は生徒の伴走に徹するという、教師の教育観の転換が何よりも重要だと考えています。

田中 先生方がそうした教育観を持てるようにするためにも、自校の学校教育目標を踏まえて、探究学習を教育課程にどう位置づけるかを考える、カリキュラム・マネジメントが求められます。

松下 新学習指導要領の新しい科目名を見ても分かる通り、教科学習においても「論理」や「探究」が重視されています。探究学習は、「総合的な探究の時間」のみで行うものではなく、「総合的な探究の時間」と教科学習との連携や、教科間を横断して取り組むことが求められています。各教科の授業でも問いを重視し、「よい問いとは何か」を生徒が感じられるような授業を学校全体で行うことができれば、より深い探究ができ、生徒の資質・能力も高まっていくのではないでしょうか。

VIEWnextは次号、創刊400号を迎えます！

本誌の前身である『進研ニュース』が産声を上げたのは、1974年8月15日。今日に至るまでの48年間、『VIEW21』、『VIEW next』と名称を変更しながらも、常に先生方とともに、これからの学校教育を考える情報誌として研鑽を続けてまいりました。そして次号、弊誌は創刊400号を迎えます。それを機に、さらに読みやすく、読み応えのある誌面へとリニューアルをいたします。

VIEWnext これまでの歩み

1974年

創刊。進学指導にあたる高校教師の支援を目的に、4ページのタブロイド版でのスタート。

1983年

創刊10年を機に、タブロイドからB5判の情報誌に刷新。90年代に入ると、「大学入試情報中心」から「進路指導情報中心」へ編集方針を転換。

1995年

誌名を『進研ニュース VIEW21』に変更。「21世紀を見つめ、今後の社会をたくましく生きていくためには、どのような進路指導が望まれるのか」を、現場の先生とともに考えていく情報誌へ。

1998年

「生徒と教師のコミュニケーション」をコンセプトにした表紙に変更。

2004年

B5判からA4判へと判型を変更。図版などを大きくし、見やすい誌面に。

2006年

この年の10月号で創刊300号を迎えた。特集のテーマは、「高校教育の『不易と流行』」。

2017年

全ページをカラー化し、誌面デザインを一新。高校教育が転換点を迎える中、これからも教育のあり方のヒントとなるような情報を提供していく決意を新たにする。

2021年

誌名を『VIEW next』に変更。21世紀のその先も、学校や先生方の今に寄り添い続け、ともに学校教育の未来を描けるような学校教育のパートナーを目指すという決意を込める。

2023年6月

創刊400号を機に、さらなる読みやすさを追求するとともに、より“役立ち”、“面白く”、“勇気づけられる”誌面へと大リニューアル予定。

創刊400号となる『VIEW next』高校版6月号は、6月20日発刊予定です。どうぞご期待ください！

For School Section

学校改革や組織運営に役立つ
事例や情報を、
先生方の思いを乗せてお届けする

P.26

お勧めの分掌▶ 管理職 教務担当 進路担当

指導変革の軌跡

その時、教師は何を考え、どう動いたか。
学校改革の過程を当事者の言葉で追う

京都府・私立立命館中学校・高校

土曜授業の改革

教師も生徒も「わくわく」があふれる
「サタデーボックス」で、学ぶ喜びを体感

P.30

お勧めの分掌▶ 管理職 教務担当

—疑問や課題を解決！実践につながる！—
新課程レポート
ベネッセ教育情報センター

現場が直面する課題や疑問の解決に
つながる事例や解説記事を提供

秋田県立湯沢高校

新課程初年度の総括と今後の展望

「育成を目指す資質・能力の設定と共有」を出発点に、
観点別評価や探究学習を深化させる

P.34

お勧めの分掌▶ 学年団 担任

輝く学年団を訪ねて

学年経営に悩む先生方に！
チームづくりの秘訣を掘り下げる

長崎県立松浦高校　1学年団

あたり前を丁寧に見直しながら、
生徒支援のアイデアを活発に出し合う

P.38

お勧めの分掌▶ 管理職

学校危機管理 基礎講座

いざという時の対応は平時の準備で決まる。学校危機管理の専門家が解説

個人情報の管理

京都府・私立立命館中学校・高校

土曜授業の改革

教師も生徒も「わくわく」があふれる「サタデーボックス」で、学ぶ喜びを体感

変革の背景

将来構想に基づき、土曜授業を見直し、「好き」を追究する講座をスタート

2月下旬の土曜日。京都府・私立立命館中学校・高校の体育館では、生徒が3人1組でAED（自動体外式除細動器）の操作訓練をしていた。「呼びかけは大きい声で！」と教師がアドバイスすると、生徒は訓練用人形に「傷病者発見！」「大丈夫ですか」と呼びかけ、真剣な表情で胸骨圧迫を施した（**写真1**）。

同じ頃、ある教室では、生徒がボードゲームに熱中していた。「鉄のカードと土のカードを取り換えてくれへん？」「鉄3枚とならええわ」などとプレイヤー同士で交渉しながら、勝利を目指していた。また、校舎の最上階では、天文学を研究する大学院生を講師に招いた天体観測を行っていた（**写真2**）。

それらはいずれも、2022年度に始めた「サタデーボックス」の光景だ。有志の教師が活動内容を自由に設定した講座を開講し、生徒がその中から自分の興味や希望進路などに応じて参加する。評定にかかわる評価はなく、生徒が学ぶ喜びを体感する場になっている。

サタデーボックスを始めたきっかけは、21年度の教育課程の改訂にあった。20年度、学校法人立命館が示した「学園ビジョンR2030」（＊）を踏まえ、同校は将来構想「R2030チャレンジデザイン」（**図1**）を策定。

写真1　「人が倒れています！どうしよう！」の講座では、生徒は救助者・通報者に分かれ、人形を使った心肺蘇生術を練習した。

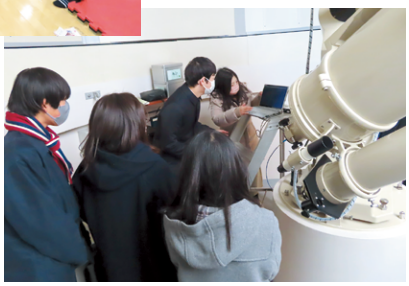


写真2　「宇宙を観る阪大大学院生の日々」の講座では、天体望遠鏡で宇宙の何を観測し、どういう情報を得ているのかを、実際に研究者と一緒に体験した。

学校概要

◎**設立**　1905（明治38）年
◎**形態**　全日制／普通科／共学
◎**生徒数**　中学校：1学年約240人
高校：1学年約360人
◎**2022年度入試合格実績（現役のみ）**　国公立大は、北海道大、京都大、大阪大、神戸大、九州大、京都府立医科大、大阪公立大などに38人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大、立命館アジア太平洋大などに延べ413人が合格。

※プロフィールは、2023年3月時点のものです。

そこに描いた「自主自立の教育」「グローバル教育」「STEAM教育」を具現化する教育課程を検討した結果、探究力の一層の育成、生徒の意欲向上やキャリア形成の支援などが方針として打ち出され、授業を週5日にし、土曜日は、探究学習やキャリア学習、学校行事など、生徒の多様な挑戦を支援する日とした。

土曜日の活用に関するワーキンググループで、後にサタデーボックス委員長となる小林誠先生が提案したのが、生徒と教師が自由に活動できる講座だった。

「以前から、生徒の学習姿勢が受け身であることに課題を感じ、科目の形で学びが分割されていることに疑問を持っていました。科目に関係なく、生徒が自分の好きなことを追究する場が必要だと考えていました」

その提案に白井有紀副校長が賛同したことで、改革が動き出した。

「土曜日の活用について、教師からは、『授業を続けたい』、『部活動に充てたい』といった強い声がありました。しかし、将来構想で打ち出したSTEAM教育や探究学習につながる教育活動を実現すべきだと考えました。小林先生の提案は、教師や生徒の『面白そう』、『やってみたい』といった純粋な思いで成り立つものでした。テストや成績といった外発的な動機ではなく、わくわく感を持って自らの意志で自律的に学ぶ生徒は、本校が探究的な教育を発展させていくための原動力になると考えたのです」

変革の一手

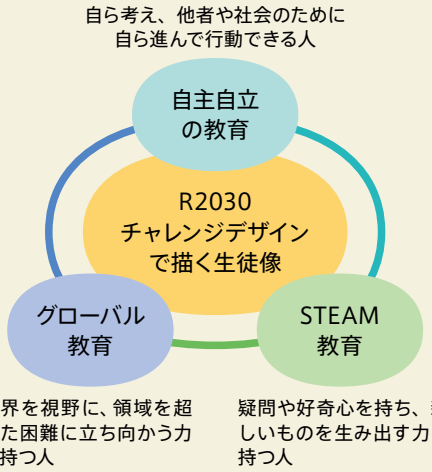
教師主体で企画を立案し、「やらされ感」を払拭

小林先生を中心に企画の草案を作成し、22年度は、土曜日の午前に年間12日開講することにした（**図2**）。開講日の部活動は午後からに限定し、生徒がサタデーボックスと部活動のどちらにも取り組めるようにした。

以前、外部講師を招き、全教師・生徒が参加して行った「土曜講座」は、内容を講師に委ねていたため、生徒も教師も次第に受け身となり、形骸化してしまった。サタデーボックスは教師に講座を設けてもらわなければ成り立たないが、開講は任意とした。企画の概要を説明する職員会議で小林先生は、自身が開講する「泥団子研究所」で作る泥団子を実際に見せて活動の意義を伝えた。すると、瞬く間に10人以上の教師が開講を表明した。

「いくつ開講できるのか不安でしたが、建学の精神の『自由と清新』を重んじる本校の先生方なら、学びを自由に追究する講座に賛同を得られると信じていました」（小林先生）

図1 「R2030チャレンジデザイン」で描く生徒像



※学校資料を基に編集部で作成。

図2 「サタデーボックス」実施概要

- **開講日**　土曜日の午前、1コマ50分間を4コマ、全12日
- **開講形態**　3回を1ピリオドとし、3回連続した講座を1回、または1回完結の講座を3回開講。3回連続講座は原則すべて参加する
- **講師**　同校教師、または教師によるコーディネートの下、卒業生や専門家などを講師として招聘
- **講座内容**　講師が活動内容を自由に設定（講座例はP.29 図3参照）
- **講座数**　1ピリオド約20講座
- **参加生徒数**　年間延べ約2,000人

※学校資料を基に編集部で作成。

＊「学園ビジョンR2030」に掲げられた3つの学園像は、「学び続ける社会の拠点としての学園」「人類社会における様々な課題に挑む学園」「ダイバーシティ＆インクルージョンを実現する学園」、3つの人間像は、「チャレンジ精神に満ちた人間」「社会の変化に対応し、自ら考え、行動する人間」「グローバル・シチズンシップを備えた人間」、6つの政策目標は、「新たな価値創造の実現」「グローバル社会への主体的貢献」「テクノロジーを生かした教育・研究の進化」「未来社会を描くキャンパス創造」「シームレスな学園展開」「多様性を生かす学園創造」。

最初に手を挙げた教師が中心となって「サタデーボックス実行委員会」を立ち上げ、パンフレットやPR用の旗の製作、講座の予約システムの整備などの準備を進めた。第1ピリオドでは、全24講座の定員300人に対して800人以上の生徒からの申し込みがあった。「生徒は申し込んでくれるだろうか」といった教師の不安は杞憂に終わった。

「生徒は様々な好奇心を持っているのだと実感しました。教科学習や部活動で忙しいはずなのに、どの講座もキャンセル待ちでいっぱいです。生徒の意欲に応える場を学校が提供できたことは、将来構想の実現に向けても大きな意義がありました」（小林先生）

「授業にはない学びを届けたい」生徒への思いから講座を開講

教師が開講する動機は様々だ。「担当教科の数学と離れて、好きなことができる」と語るのは、趣味の茶道や和菓子の講座を開講した笠巻奈月先生。

「習い事をしたいと思っても、それなりの決意が必要ですし、費用もかかります。その点、学校の講座なら、生徒は気軽にチャレンジできますし、自分に合わないなと思っても、自身の適性を知るよい機会になります。その一助になればと思い、開講しました」

理科担当の奥田一生先生は、生徒の意欲に応える形で、冒頭に紹介したボードゲームの講座を設けた。

「生徒にどんな資質・能力を身につけたいのか、アンケートを取ったところ、圧倒的に多かったのがコミュニケーション力でした。そこで、プレイヤー同士が交渉しながら進めるボードゲームを、コミュニケーション力を身につけるツールとして利用することにしました。最初はうまく交渉できなかった生徒が、論理的に話せるようになるなど、授業とは違うやりがいを感じています」

英語科の松尾由紀先生は、生徒の志を育みたいと考え、社会変革の活動に取り組む卒業生に活動内容や思いを語ってもらう講座を設けた。同講座で使用する言語は英語とし、生徒が英語を使って発信する場にもした。

「言語は、知識・技能を習得した上で、何を発信するかが大切です。授業に加えて、生徒が英語で発信できる場をもっと設けたいと思い、講座を活用することにしました」

松尾先生とのチーム・ティーチングで、成績上位層向けのIELTSの講座を担当したアン・フラナガン先生は、講座を通じて生徒が成長する姿を見るのが楽しいと語る。

「授業では発表をよく行いますが、即興的な発信力を伸ばしたい生徒は物足りなく感じていると思います。IELTSの講座では、

中学校副校長
白井有紀 しらい・ゆき
教職歴30年。同校に赴任して25年目。英語科。

サタデーボックス実行委員長
小林 誠 こばやし・まこと
教職歴19年。同校に赴任して19年目。情報科主任。

MS推進機構
松尾由紀 まつお・ゆき
教職歴15年。同校に赴任して12年目。英語科。

グローバル教育部副部長
アン・フラナガン
教職歴28年。同校に赴任して24年目。英語科。

SSH推進機構
笠巻奈月 かさまき・なつき
教職歴11年。同校に赴任して11年目。数学科主任。

入試部
奥田一生 おくだ・いっせい
教職歴6年。同校に赴任して2年目。理科、情報科。

生活指導部
川嶋頌梧 かわしま・しょうご
教職歴5年。同校に赴任して3年目。美術科。

留学したい、海外で活躍したいという生徒が実践的なやり取りをたくさん経験できる場にしていて、英語がどんどん上手になっていく生徒の姿に、私もやりがいを感じています」

変革の成果・展望

講座を開くことを希望する生徒も。課題は、取り組みの裾野を広げること

サタデーボックス1年目は、全63講座を開講した（**図3**）。多くの講座で定員以上の申し込みがあり、活気あふれる活動が展開された。運営面で難しかったのは、部活動との兼ね合いだ。開講日の午前も部活動を実施したいという声は継続してあったが、「授業や行事の枠にとどまらない学びの機会を学校として生徒に保障する」ことを説明し、例外は認めなかった。

講座内容の設定も難しかったと、小林先生は打ち明ける。

「私は、失敗した理由を考えて改善するプロセスを生徒に体験してもらおうと、『泥団子研究所』の活動計画を立てました。しかし、目標が生徒のレベルと合っておらず、簡単に達成されてしまいました。サタデーボックスは自由な講座とは言え、教科の授業と同じように、生徒の実態を把握した上で目標を設定する大切さを痛感し、計画を再考しました」

建築の講座を担当する美術科の川嶋頌梧先生も、同様のことを感じたと言う。

「まずは成功体験を積めるように最初の課題を簡単にしたのですが、興味を失ってしまう生徒がいました。生徒の力を過小評価していたと反省し、次のピリオドでは課題のレベルを上げたところ、生徒は生き生きと取り組み、自分からアイデアを提案してくれる生徒も増えました。今後も生徒と一緒に試行錯誤し、時には私が失敗する姿も見せながら、ともに学んでいきたいと思っています」

サタデーボックスは、中学生と高校生が一緒に活動するため、講座では学年を超えて交流し、刺激を与え合う姿も見られる。また、受講がきっかけとなり、部活動として競技かるた部や数学同好会を立ち上げようとする生徒や、自分で講座を開きたいと希望する生徒も現れている。学年を超えた交流の広がりや、好きなことを追究する楽しさを実感したことが、生徒の主体的な活動を後押ししている。

教師も、充実した講座とするために、心理学を勉強し直したり、外部人材に協力を依頼したりする中で、好奇心が刺激されて、「わくわく」した日々を過ごしたと振り返る。

今後の課題は、取り組みの裾野を広げることだ。

「今年度は定員をオーバーする講座もあったため、生徒の意欲に応えられるよう、講座数を増やしたいと考えています。教師の心が何より動くのは、生徒の成長に触れた時ですから、講座を通した生徒の反応などを校内で共有しやすくする方法も考えているところです。また、何度も参加する生徒がいる一方で、一度も参加していない生徒もいます。すべての生徒・教師がわくわくし、学ぶ喜びを体感できるような講座を目指して、今後も取り組んでいきます」（小林先生）

図3　サタデーボックスの講座（例）

3回連続講座	IELTSスピーキングに役立つヒント	IELTSテストに向けて、スピーキングについて助言し、様々なトピックを提供。
	映画鑑賞	中高生に見てほしい映画を鑑賞し、映画に隠されたメッセージやメタファーを読み解く。
	音感トレーニング	感じる力や聴く力、音感、リズム感など、すべての音楽に共通して役立つ力を身につける。
	泥団子研究所	ぴかぴかでまん丸な究極の泥団子を目指して研究を重ねる。
単発講座	季節の和菓子をたしなむ	季節ごとに種類が変わる和菓子を通して、四季を愛でる文化を堪能する。
	心理学入門	ワークショップを行いながら、中学・高校の授業にはない心理学に触れる。
	宇宙一美しいビスマス結晶の作り方	ビスマス結晶を作り、その製作過程で表れる、独特の四角い幾何学模様や変色を観察する。

※学校資料を基に編集部で作成。

新学習指導要領実施２年目となる2023年度は、初年度の総括を踏まえた指導改善が求められる。現場の疑問や課題を解決し、新たな計画・実践につながるよう、全国の実践事例や解説記事を提供する。

テーマ

新課程初年度の総括と今後の展望

実践レポート

「育成を目指す資質・能力の設定と共有」を出発点に、観点別評価や探究学習を深化させる

秋田県立湯沢高校

秋田県立湯沢高校では、生徒の実態を踏まえて、育成を目指す８つの資質・能力「湯高力（とうこうりょく）」を設定。それを基に各教科でルーブリックを作成し、授業改善や観点別学習状況の評価（以下、観点別評価）を推進してきた。さらに、２０２２年度から「デジタル探究」を設定し、デジタルツールを活用した新たな探究学習のあり方を模索している。

設立　1943（昭和 18）年
形態　全日制／普通科・理数科／共学
生徒数　1学年約 175 人
2022年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、岩手大、東北大、秋田大、山形大、千葉大、新潟大などに 67 人が合格。私立大は、盛岡大、東北学院大、獨協大、東海大、日本大、同志社大などに延べ 132 人が合格。

※プロフィールは、2023 年３月時点のものです。

「湯高力」の育成に向け、授業改善を推進

秋田県立湯沢高校は、２０１９年度からカリキュラム・マネジメントの観点で教育改革を推進してきた。教師が対話を重ね、生徒の現状と目指したい姿を語り合い、校訓や新学習指導要領で示されている資質・能力の３つの柱とひもづけをしながら、育成を目指す８つの資質・能力「湯高力」を設定。さらに、「湯高力」を、教科・科目ごとに「習得（わかる）」「利用（できる）」「活用（使える）」という３段階のルーブリックで示した。

20年度は、「湯高力」やルーブリックを基に、授業改善を推進。授業の冒頭に、本時で育成を目指す「湯高力」を示して、生徒も教師も「湯高力」を意識して授業に臨むようになった。さらに、定期考査の各問題に、測ろうとしている「湯高力」を明示する試みも始まった。そうした取り組みが校内に浸透するのに伴い、次第に生徒も、「湯高力」を意識して学ぶようになっていった。その後も校内で研修を重ね、授業実践と改善を繰り返し、ルーブリックを用いた観点別評価を導入するなど、取り組みを深化させていった（**図1**）。

図１ 湯沢高校の教育改革の流れ

2019年度	育成を目指す資質・能力を全教師で検討し、「湯高力」を設定
↓	
2020～2021年度	各教科・科目で「湯高力」のルーブリックを作成し、授業改善を図る
↓	
2022年度	観点別評価を実施して授業改善の成果を検証し、さらなる改善を図る

※「湯高力」の策定やこれまでの湯沢高校の教育改革の詳細は、『VIEW next ONLINE』で紹介（詳しくは P.33）。

観点別評価の実践と成果

「湯高力」を軸としたルーブリックを用いて、生徒の学習改善と教師の指導改善を推進

観点別評価の導入を機に、授業改善が大きく前進

19年度からの教育改革を素地として、22年度には、「湯高力」をベースとしたルーブリック（**図2**）を用いた観点別評価を開始した。「湯高力」の作成の中心となった2学年主任の平田恵子先生は、「全教科で評価方法に関する表記を統一するなどして、生徒にとって、『何を、どのように評価されるのか』が分かりやすいルーブリックを目指しました」と説明する。

観点別評価の実施は、授業改善を前進させている。1学年主任で地理歴史・公民科担当の高橋伊津子先生は、「観点別評価が加わり、『この資質・能力を評価するにはこんな活動が必要だ』などと逆算して指導を見直しています。例えば私の授業では、『湯高力』の対話力や協働力を育む目的で、対話、表現活動を充実させています」と語る。一方、数学科担当の柴田和明先生は、「話し合いを増やしたことで、アウトプットに必要な知識・技能の不足が明らかになったため、思考・判断・表現の土台となる基礎を習得する学びを手厚くしました」と、「湯高力」を軸とした授業改善を語る。

各教科での試行錯誤は、互見授業や研修を通して全校で共有され、他教科の取り組みを参考にして互いに高め合う姿が見られている。小松弘樹校長はこう述べる。

「教師が観点別評価を前向きに捉え、自由に議論を交わす中で、主体的に授業改善に取り組む風土が生まれています。本校に異動をしてきた教師の授業が、みるみる変わる様子も見られています」

観点別評価は、生徒の学びにも変化をもたらしている。特に、日々の授業や定期考査などでの「湯高力」を意識させる働きかけを通して、生徒が学びの意味や目的を考えるようになったことが大きい。

「獲得した知識を生かして主体的に授業に参加する生徒の姿が見られています。難しい問題に粘り強く挑戦したり、教師が希望者向けに用意したプリントに意欲的に取り組んだりする姿も見られるようになりました」（平田先生）

図2 2022年度から運用している科目別ルーブリック

科目	地理総合	単位数	2単位
		履修学年/学科/類型	1学年/普通・理数
目標	・世界の生活文化の多様性や地球的課題への取組などを理解し、地図や地理情報システムなどを用いて、調査や諸資料から様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付ける。 ・地理に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を、多面的・多角的に考察し、課題の解決に向けて構想する力や、考察、構想したことを効果的に説明したり、議論したりする力を養う。 ・課題を主体的に追究、解決しようとする態度を養い、日本国民としての自覚、国土に対する愛情、世界の諸地域の多様な生活文化を尊重しようとする大切さについて自覚を深める。		

評価の観点		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
湯高力		【知識・技能】	【課題対応能力】【論理的思考力】【対話力】	【協働力】【自己管理能力】【前向きにやり遂げる力】【公共心】
学びの段階	活用（使える）	●地理に関わる諸事象に関して、世界の生活文化の多様性や、防災、地域や地球的課題への取組などを理解し、現代世界を概観することができている。 ●地図や地理情報システムなどを用いて、調査や諸資料から地理に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめ、学習内容の理解の深化に活かしている。	●地理に関わる諸事象の意味や意義、特色や相互の関連を、位置や分布、場所、人間と自然環境との関係、空間、地域などに着目して、一般化した概念を用いて、世界各地の諸事象を捉えることができる。 ●地理的な課題の解決に向けて、考察や構想したことを効果的に説明したり、それらを基に議論したりしている。	●よりよい社会の実現を視野に、地理に関わる諸事象についての課題を主体的に追究しようとしている。 ●日本及び世界の諸地域の生活文化の多様性を尊重し、国際理解や国際協力への関心を高めるとともに、持続可能な社会づくりに必要なことを他者と協働して考え、取り組もうとしている。
	利用（できる）	●地理に関わる諸事象に関して、世界の生活文化の多様性や、防災、地域や地球的課題への取組などを理解し、現代世界を概観することができている。 ●地図や地理情報システムなどを用いて、調査や諸資料から地理に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめている。	●地理に関わる諸事象の意味や意義、特色や相互の関連を、位置や分布、場所、人間と自然環境との関係、空間、地域などに着目して、多面的・多角的に考察している。 ●地理的な課題の解決に向けて、考察や構想したことを効果的に説明することができる。	●よりよい社会の実現を視野に、地理に関わる諸事象についての課題を主体的に追究しようとしている。 ●日本及び世界の諸地域の生活文化の多様性を尊重し、国際理解や国際協力への関心を高めるとともに、持続可能な社会づくりに必要なことを考え、個人としてできることに取り組もうとしている。
	習得（わかる）	●地理に関わる諸事象に関して、世界の生活文化の多様性や、防災、地域や地球的課題への取組などを理解している。 ●地図や地理情報システムなどを用いて、調査や諸資料から地理に関する様々な情報を調べることができる。	●地理に関わる諸事象の意味や意義、特色や相互の関連を、位置や分布、場所、人間と自然環境との関係、空間、地域などに着目して考察している。 ●地理的な課題について、問題の発生原因や現象を的確に捉え、それらを関連づけて考察し、まとめることができる。	●よりよい社会の実現を視野に、地理に関わる諸事象についての課題を主体的に追究しようとしている。 ●日本及び世界の諸地域の生活文化の多様性を尊重し、国際理解や国際協力、持続可能な社会づくりへの関心を高めている。
評価方法		・定期考査（筆記） ・小テスト ・提出課題	・定期考査（筆記） ・提出課題 ・グループワーク	・小テスト　・振り返りシート ・グループワーク　・提出課題 ・授業時の観察

20年度から「湯高力」の育成を目指し、教師、生徒がルーブリックを運用してきたが、観点別評価の導入に伴い、観点別の要素を各教科で話し合いながら検討を進め、新学習指導要領に準ずる内容への修正や、評価方法の表記を教科間で統一した。

※学校資料をそのまま掲載。

探究学習の実践と成果

デジタルツールを活用して、「学び方を学ぶ」探究学習を実践

「学び方を学ぶ」を目的にデジタルで探究学習を深化

同校では、22年度、秋田県教育委員会による研究事業として、従来の探究学習にデジタルツールの活用を取り入れた「デジタル探究コース」を新設。本格的な活動は23年度の2年生からだが、22年度は京都大学大学院教育学研究科の久富望（くとみのぞむ）助教の支援を受け、1年生全員を対象に「デジタル探究」という科目を設定した（＊1）。

「情報技術を活用して教科横断的な学習を行い、問題発見・解決を通して、『湯高力』を伸ばすことを目標としました」（小松校長）

22年度の「デジタル探究」は、1年間を3クールで構成した。1クール目は、プログラミング言語のPythonを用いて、全国と湯沢市の人口データを比較するグラフを作成し、生徒同士が批判的な視点で意見を交わし合った。2クール目は、湯沢市の課題から関心の高いものを選び、データ分析などをしながら解決策を探った。3クール目は、三角ロジック（＊2）や対話型論証モデル（＊3）などの思考法を学び、1年間かけてデジタル探究の土台となる力の育成を図った（**図3**）。

「『学び方を学ぶ』ことを目的として、探究学習でデジタルツールを活用すると、どのような学びが生まれるのかを、教師自身も考えながら取り組みました」（高橋先生）

生徒のデジタルツールの活用状況について、1学年副担任の大隅哲也先生はこう述べる。

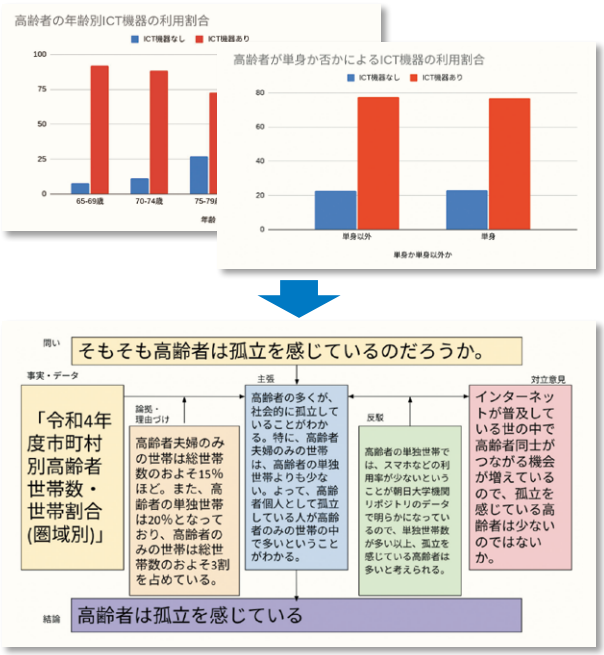
「プログラミングでは苦労する生徒も多くいましたが、グラフの作成などのデータの活用方法はすぐに習得していました。さらに、生徒同士で主張をし合うなど、思考力を発揮する場面では、私たちが想像していた以上の力を発揮していました」

既に、データ分析などを通じて身につけた論理的思考力を他教科の学習に生かしたり、反対に、教科学習で学んだことを探究学習に活用したりする往還が見られているという。例えば、公民科の授業で領土問題を取り上げた際、多様な意見を踏まえて論理的に思考して解決策を探ることが求められる場面があった。生徒は、「デジタル探究」でデータを基に主張や反駁（はんぱく）をした経験を思い出し、論じ合って思考を深めていく姿が見られた。

「成果発表ではなく、データ分析やプログラミングといった『学び方』の習得を教育目標にしたため、他教科の学びに生かしやすかったのでしょう」（平田先生）

23年度は、2年生の希望者が「デジタル探究」をさらに深めていく。扱うデータが多様になれば、学習はさらに広がっていきそうだ。

図3 データ分析と対話型論証モデルによる考察



ある生徒は、「インターネットが普及し、高齢者同士がつながる機会が増え、孤立する高齢者が減った」という仮説を、データ分析と対話型論証モデルを用いて考察した。まず、スマートフォンやパソコンなど、非対面でも人と交流ができる情報通信機器の利用状況を分析し、対話型論証モデルで「情報通信機器が普及する中でも高齢者は孤立を感じている」と、自身の結論を導き出した。　※学校資料を基に編集部で作成。

＊1　本実践は、京都大学国際高等教育院附属データ科学イノベーション教育研究センターから支援を受けた。
＊2　自分の意見を説明するために、「事実・データ」「論拠」「主張」の3つを明確にする論理的な思考法。
＊3　ある問題に対して、他者と対話しながら、根拠を持って主張を組み立て、結論を導く活動を図式化したもの。P.20に、考案者である京都大学大学院教育学研究科の松下佳代教授のインタビューを掲載。

新課程初年度における成果と展望

取り組みを通じた対話の活性化が、教師と生徒の成長につながる

すべての教師の実践で、よりよい学びを追究

観点別評価の実践を進めるのに伴い、新たな課題も見えてきた。現在は、どの教科でも、8つの資質・能力のすべてを育成する方針だが、教科の特性に応じて軽重をつけてもよいのではないか。生徒がこれまで以上に何を頑張ればよいかを自覚し、自己調整ができる仕組みがあるのではないか。そうした様々な意見が教師から出され、現在も検討が続けられている。

「議論だけに終始せず、出てきたアイデアをまずはひな形にして実践を重ね、改善していく中で、よりよい形を模索していきたいと考えています」（平田先生）

新課程に向けた新たな取り組みを進める中で、校内では対話や議論が活発になり、そこから形になったものが生徒の成長につながっているという実感を教師たちは抱いている。

「『デジタル探究』などに取り組む中で、先が見えない社会で教育も変化が求められているため、『どうすればよりよい学びを生み出せるのか』を追究することの大切さを感じました。本校は、教育改革に全教師で取り組んだからこそ、大きな成果を得られたと実感しています。課題はまだ多いのですが、『こうでなければ』といった思い込みを捨て、刻々と変化する状況に対応しながら、今後も全教師で新たな教育を考え続けていきます」（小松校長）

校長
小松弘樹
こまつ・ひろき
教職歴37年。同校に赴任して3年目。

2学年主任
平田恵子
ひらた・けいこ
教職歴20年。同校に赴任して5年目。国語科。

1学年主任
高橋伊津子
たかはし・いつこ
教職歴21年。同校に赴任して5年目。地理歴史・公民科。

1学年担任
柴田和明
しばた・かずあき
教職歴10年。同校に赴任して1年目。数学科。

1学年副担任
大隅哲也
おおすみ・てつや
講師歴11年。同校に赴任して2年目。理科。

2021年度に公開した秋田県立湯沢高校の新課程レポートは、VIEW next ONLINE でご覧いただけます

◉ 21年度4月号　生徒の実態から育成を目指す資質・能力を設定し、科目別ルーブリックで授業改善を図る
https://view-next.benesse.jp/view_section/bkn-hs/article01062/

◉ 21年度6月号　科目別ルーブリックを授業に落とし込み、教師の指導、生徒の学びの質を高める
https://view-next.benesse.jp/view_section/bkn-hs/article01814/

新課程に関する情報は、『ハイスクールオンライン』でお届けします！
・新教育課程の参考になる特設コーナー設置　・過去のオンラインセミナーのアーカイブ動画・資料　などを掲載！
—疑問や課題を解決！実践につながる！—
新課程レポート
ベネッセ教育情報センター
『ハイスクールオンライン』トップページ＞指導のヒントを探す＞新課程への対応からアクセス
https://bhso.benesse.ne.jp/hs_online/sidou/shinkatei/shidou/index.html

輝く学年団を訪ねて

あたり前を丁寧に見直しながら、生徒支援のアイデアを活発に出し合う

長崎県立松浦高校　1学年団

学年団が直面した課題

◎普通科の特色化・魅力化を図るために新設された地域科学科の入学者が、定員を大きく下回った。

◎高校入学までに、高い目標を掲げて主体的に行動する力や自己肯定感などが十分に育まれていない生徒が増えていた。

学校概要

2017年度から、生徒が地域課題をグループで調査・研究し、松浦市へ政策提言する「まつナビ」を実施。20年度からは、文部科学省の委託事業である「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の指定を受け、「まつナビ・プロジェクト」へと発展。さらに22年度からは「新時代に対応した高等学校改革推進事業」の指定を受け、普通科改革に取り組む。松浦市、長崎大学、長崎県立大学、松浦市商工会議所、松浦市内の企業等がコンソーシアムを形成し、同校の2つの文部科学省委託事業の活動を支援している。

設立　1961（昭和36）年
形態　全日制／地域科学科・商業科／共学
生徒数　1学年約50人
2021年度進路実績（現役のみ）　国公立大は、長崎大、長崎県立大に4人が合格。私立大は、 國學院大、東洋大、関東学院大、関西外国語大などに延べ19人が合格。短大・専門学校進学20人。就職17人。

※プロフィールは、2023年3月時点のものです。

普通科改革のパイロット校として新しい一歩を踏み出す

長崎県立松浦高校は、松浦市、大学、企業・経済団体などと連携し、高校3年間を通じて地域課題を探究する学校設定科目「まつナビ・プロジェクト」を実施している。新学習指導要領で示された資質・能力を地域と連携しながら育成する同校は、これまでも注目を集めてきたが、2022年度の1学年団は、さらに大きな変革の当事者として全国の注目を集めることになる。それは、同学年が、22年度新設の地域科学科の1期生を担当するからだった。高校改革の一環である普通科の特色化・魅力化を図るため、22年度から普通教育を主とする学科の中に普通科以外の学科を設置できるようになり、同校は、普通科に代えて地域科学科を創設した。

しかし、「進学に不利になる」「課題の探究だけに取り組む」といった誤解もあり、地域科学科の1期生の入学者は定員を大きく下回った。そうした状況の中、1学年主任を務めることになった相原美詠先生が、船出にあたって学年団の教師に伝えたのは、「生徒が毎日楽しく登校できる学年づくり」というシンプルな方針だった。

「本校の生徒は素直で、教師に言われたことにはきちんと取り組みますが、主体的に行動したり、高みを目指したりすることを躊躇しがちです。また、ここ数年、自己肯定感が十分に育まれていない生徒の増加を気がかりに思っていました。『まつナビ・プロジェクト』を充実したものにするためにも、あらゆる教育活動を通して、自ら考え、律し、行動する力を生徒に育みながら、自己肯定感を高めたいという私の思いを、先生方に伝えました」

キャリア形成部副主任で、「まつナビ・プロジェクト」のリーダーを務める茶園孝一先生は、現状をプラス思考で捉えることで相原先生の方針を後押しした。

「地域科学科の1期生は定員割れになってしまったけれど、その分、生徒一人ひとりにじっくり向き合おうと、学年団の先生方と話しました。すると、『この学校に期待してきてくれたのだから、それぞれのよいところを伸ばしてあげたいですね』といった前向きな言葉が飛び交い、これから始まる1年間への期待を互いに高め合い、スタートを切ることができました」

生徒に自信をつけさせるため、新たな指導を学年会で企画

相原学年団では、時間割の中に組み込まれ

リーダーに聞く！5つのQ&A

Q どのようなチームを目指しましたか？

A 担任の先生が苦労を1人で背負い込むことがない学年団を目指しました。

Q リーダーとして心がけていることは？

A 明るい学年団づくりです。私はそそっかしく、それを先生方にどんどん指摘していただき、時には笑ってもらいたいと思っています。そして、大変な仕事ほど、学年主任の自分が率先してやるようにしています。

Q 学年団としての「成功」は？

A 生徒は明るく元気に、そして先生方は自分の得意分野を発揮し、日々を過ごしている状態です。

Q リーダーとして自覚する長所は何ですか？

A 前向きなところです。毎日いろいろなことがあって、へこむこともありますが、少し時間が経てば、くよくよしては駄目だと、気持ちを切り替えることができます。

Q リーダーとして自覚する短所は何ですか？

A 緻密さに欠けていると自覚しています。直感で新しいことを始めてしまい、あとになって「これはすごく大変だ！」と気づき、焦ることがあります。

た45分間の学年会を毎週欠かさず実施し、生徒についての情報交換や指導の目線合わせを行った。「まつナビ・プロジェクト」の活動については最も時間を割いて話し合い、生徒の様子も丁寧に共有した。活発なコミュニケーションを重ねるうちに、担任から様々な問題提起が行われるようになった。学年団最年少で地域科学科担任の田中輝一先生は、成績上位層の引き上げを相原先生に提案した。

「成績上位層の生徒の向学心を喚起するためには、特別感のある取り組みが必要だと考えました。そこで、国語、数学、英語の3教科について、成績上位者を選抜して、添削指導を行うことを提案しました」

一方、成績下位層の生徒の支援にも着手した。地域科学科の担任で、英語科の担当の麻生千絵美先生と、商業科の担任で、数学科の担当の中田紀子先生、そして国語科の担当の相原先生が話し合う中で、「成績下位層の生徒は、文章を書くことに抵抗感を持っているのではないか」という仮説にたどり着いた。

「文章を書くのが苦手な生徒でも取り組むことができる新聞のコラムの書き写しや、記事の感想を書かせる活動を、学年会で提案しました」（相原先生）

そして、取り組みの成果は、すぐに学年団で共有した。

「添削指導を受けている生徒の中には、定期考査の結果で上位を維持するだけでなく、ほかの生徒に勉強を教える姿が見られるようになるなど、リーダーとしての人間的な成長も感じています」（田中先生）

「成績下位層の生徒についても、記述式問題に粘り強く取り組むようになったり、思ったような解答が書けなかった時は個別に質問に来たりするなど、書くことを諦めない雰囲気が醸成されていると感じます」（中田先生）

茶園先生は、「学年会では毎回、各先生からいろいろなアイデアが出ますが、どんなアイデアも否定されることはなく、どうすればよりよい形で実現できるかを話し合えています」と、学年会の前向きな雰囲気を説明する。

「こんな力が身についたら、生徒はもっと学校生活が楽しくなるはずと、教師としてできそうなことや、やってみたいことを、皆が遠慮せずに提案することができています」

「生徒のために」を胸に、教育活動の本質を問い直し続ける

教育活動の軸である「まつナビ・プロジェクト」の充実のため、学年団が力を入れているのは、一つひとつの活動の意義を確認し、前年踏襲に甘んじないことだ。

「私や茶園先生がたたき台として出す活動案を、今年度の1年生の実態に合った内容になっているかという観点で、学年団の先生方で確認してもらいました。例えば、松浦市の魅力を発表する活動は、例年は班ごとで行っていましたが、今年度は一人ひとりの達成感を高めるため、班による発表の前に、個人によるレポートの作成を組み込みました。また、地域課題についても、資料だけではなく、校外に出て地域の人々の声を拾い、それらを基

写真　生徒とともに教師も地域を学ぶ――地域の行事の見学

松浦市の魅力を授業で学ぶ

その後、生徒と1学年団の教師が、地域の行事を見学

松浦高校の教師の多くは、松浦市外に居住している。「自分たち教師も、地域に対する関心をもっと高く持つべきではないか」という学年会での問題提起を受けて、学年団の教師たちは、生徒とともに、地域の伝統行事を見学した。地域を知ろうとする教師の姿も、生徒にとって学びの材料の1つになっている。

にして調べるよう指導するといったアイデアが出され、実現しました」（相原先生）

また、各クラスでの発表を素案として出した相原先生に、麻生先生が「学年全体で行いたい！」と提案した。

「2学科とも特徴ある学科ですから、互いの発表を聞くことで、多様性を学ぶ場にもしたいと相原先生に提案したところ、受け入れてもらえました。実際、地域科学科の生徒は、商業科の生徒が作成したプレゼンテーションのスライドを見て、『高校生がこんな立派なスライドを作成できるのか』と驚いていました」

22年度のスタート時に学年団で目線合わせをした、一人ひとりの生徒に向き合う指導は今も続いている。「まつナビ・プロジェクト」は、2年次からはグループ探究が本格化するが、1年次の3月に決めたテーマについて、「そのテーマで納得しているか」、「グループ活動で困っていることはないか」、「キャリア形成につながるのか」と聞く面談をわざわざ生徒一人ひとりと行ったのも、「どんなに順調に見えても、不安や不満は必ずある。それらに耳を傾け、時には手を差し伸べ、解消させることで、生徒の活動への納得度が高まるはず」という、学年団での総意によるものだった。

「新しいことを始めるのは容易ではありません。でも、学年団の先生方と、『これは生徒のためになるね』と確認し合うことで、『少々大変でも、やってみよう』という気持ちが皆に生まれてくるのです」（相原先生）

日々の指導においても、各自が工夫を凝らし、その取り組みを共有している。

「麻生先生は、自ら発信できる生徒を育てるため、授業中の問いかけでは、生徒が挙手して発言するまで待つことを徹底しています。また、中田先生は、相談事がある生徒が気軽に話しかけられるように、ホームルーム前後の時間などは、職員室ではなく、教室に極力いるようにしています。あたり前の日常の中での先生方の工夫によって、学校は生徒にとって毎日楽しく登校できる場所になっていくのだと思います」（相原先生）

高校改革を先駆ける松浦高校。誰もが注視するその行く末は、1学年団の教師が日々生徒に見せる笑顔のようにきっと明るい。

1学年主任
相原美詠（あいはら・みえ）
教職歴27年。同校に赴任して3年目。国語科。

キャリア形成部副主任、まつナビプロジェクトリーダー
茶園孝一（ちゃえん・こういち）
教職歴15年。同校に赴任して5年目。地理歴史・公民科。

1学年商業科クラス担任
中田紀子（なかた・のりこ）
教職歴30年。同校に赴任して4年目。数学科。

1学年地域科学科クラス担任
麻生千絵美（あそう・ちえみ）
教職歴20年。同校に赴任して8年目。英語科。

1学年地域科学科クラス担任
田中輝一（たなか・きいち）
教職歴4年。同校に赴任して1年目。理科。

学年団 輝きのポイント

- 定員割れという現状を受け止め、生徒一人ひとりに丁寧に向き合うことを教師全員が心がけた
- どんなアイデアも否定せず、どうすればよりよい形で実現できるかを話し合える雰囲気を、学年主任が率先してつくった

学校危機管理
基礎講座

テーマ

個人情報の管理

個人情報を適切に管理するための留意点

- 人種や病歴などの「要配慮個人情報」は、特に取り扱いに配慮が必要。
- 校内では、生徒本人・保護者の同意がなくても情報共有が可能。他校はもちろん、付属校やPTAとの情報共有には、生徒本人・保護者の同意が必要。
- 校内研修などで、個人情報の取り扱いについての知識を確認し、徹底した管理と適切な共有を図る。

学校で起こり得る危機に対し、どのような備えをしておくべきか。事故や災害などが発生したら、被害を最小限にとどめるためにどう対応すればよいのか。学校の危機管理について研究する坂田仰教授が解説する本コーナー。第13回は、個人情報の管理について解説する。

特定の個人を識別できる情報であれば、番号や記号も含まれる

個人情報とは、生存する個人に関する情報、及び特定の個人を識別できる情報を指します。氏名や生年月日、住所、顔写真などはもちろん、学籍番号など、その情報単体で個人が識別できる番号や記号も含まれます。学校は卒業生の情報も保管していますが、故人であれば、その情報は個人情報に該当しません。

個人情報の中でも、不当な差別や偏見、その他の不利益が生じないよう、特に取り扱いに配慮が必要と規定されているのが、「要配慮個人情報」です。人種や病歴、犯罪履歴、犯罪被害に遭った情報などが該当します（図）。

個人情報に関する法律には、「個人情報保護法（＊1）」があります。民間事業者を主たる対象とした法律で、私立学校もその対象に含まれます。公立学校については、これまで学校の設置者である自治体が定めた「個人情報保護条例」が適用されてきました。しかし、2023年4月1日以降は、公立学校についても、個人情報保護法の共通ルールが適用されることになりました。

第三者への個人情報の提供は、緊急事態等を除き、本人の同意が必要

個人情報を取得する際には、生徒本人・保護者の同意が必要であり、同意の可否を判断できるよう、取得目的を可能な限り具体的に示すことが義務づけられています。未成年の

＊1 正式名称は、「個人情報の保護に関する法律」。

解説者

日本女子大学
教職教育開発センター
教授 坂田 仰（たかし）

大阪府の公立高校に勤務後、東京大学大学院法学政治学研究科公法専攻博士課程単位取得退学。1996年、日本女子大学に赴任。専門は、憲法学、公教育制度論。2021年9月に『新訂第4版 図解・表解教育法規』（共著、教育開発研究所）を出版。

※プロフィールは、2023年3月時点のものです。

場合のガイドラインがあり、一般的には、15歳以下の子どもについての個人情報の取得には、本人と保護者（法定代理人等）の同意が必要です。高校生の場合、成年年齢の18歳に達すれば、本人の同意のみで問題はありませんが、保護者の同意を取っておいた方が無用なトラブルの防止につながります。

取得した情報を第三者に提供する場合は、生徒本人・保護者の同意が原則必要です。ただし、生徒本人や保護者の同意がなくても、第三者への情報提供が認められる例外がいくつかあります。その1つが、法令に基づく場合です。例えば、児童虐待は、法令上、国民に通告の義務があります。ほかにも、人の生命、身体または財産を保護するために必要がある場合で、本人の同意を得ることが困難な時にも、情報提供ができます。例えば、事故に遭った生徒の保護者と連絡が取れないため、学校に生徒の血液型を教えてほしいと、病院から問い合わせがあった場合などは、情報を提供しても問題はありません。

図 個人情報の基礎知識

［個人情報］
- 生存する個人に関する情報＋特定の個人を識別できる情報
  例：氏名、生年月日、個人識別符号が含まれるものなど

［要配慮個人情報］
- 原則、本人の同意なしに取得してはならない
- 人種、信条、社会的身分、病歴、犯罪の経歴、犯罪被害情報
- その他本人に対する不当な差別、偏見、その他の不利益が生じないように、特に配慮を要するものとして政令で定めるもの
  例：身体障害、知的障害、精神障害があること
  健康診断、その他の検査の結果
  本人を非行少年、またはその疑いがある者として、保護処分等の少年の保護事件に関する手続きが行われたこと

［教師間・学校間での個人情報の共有］
- **校内：**生徒本人（保護者）の同意がなくても共有できる
- **校外（進学先、PTAなど）：**情報提供には、生徒本人の同意が必要
- **法令により提供義務：**指導要録、健康診断票
- **実務上提供が望ましい：**個別の教育支援計画

※坂田教授の取材を基に編集部で作成。

校内の教師間では本人の同意なく共有可能、付属校やPTAの場合は同意が必要

第三者への情報提供にあたっては、提供の根拠、提供年月日、提供先、提供対象など、提供した情報の内容を記録しましょう。万一トラブルが起きた際の証拠となります。

さらに、ケースごとの留意点を見ていきましょう。まず、学年間や分掌間など、校内での教師間の情報共有は、生徒本人の同意がなくても可能です。ただ、取得目的の範囲を超えた情報共有はできません。

第三者である他校に情報提供する場合は、生徒本人の同意が必要です。同一設置者や同一法人の付属校であっても、事業所が異なれば第三者とみなされます。なお、「指導要録」と「健康診断票」は、進学先や転校先への提供義務があることが法令で定められており、生徒本人の同意は不要です（＊2）。また、文部科学省が、生徒本人・保護者の同意を得た上で引き継ぐことが望ましいとしているものに、「個別の教育支援計画」（＊3）があります。東京都では、長期的に一貫性のある的確な支援を行うため、保護者の同意を得た上で学校間で引き継ぐよう努めるとしています。

PTAは第三者に該当するため、情報提供に際しては生徒本人の同意が必要です。情報取得時に、PTAに情報提供することがある旨を明記し、同意を得ておくとよいでしょう。

学校が保有する生徒や教職員の情報の中には、要配慮個人情報が多く含まれます。それらが外部に漏洩すると、特に現在は、インターネット上に流出してしまい、削除が難しくなるため、徹底した情報管理が必要です。

ただ、あまりに慎重になりすぎると、情報が共有されるべき人に共有されず、その結果、適切な支援ができないといった事態が生じかねません。個に応じた支援は、生徒の特性や家庭状況などを把握しているからこそできることです。校内研修などを通じて、個人情報の正しい取り扱いについて理解し、教師間で適切な情報共有を図って、生徒を支えていってほしいと思います。

＊2 指導要録は学校教育法施行規則第24条、健康診断票は学校保健安全法施行規則第8条による。　＊3 障害のある児童生徒の一人ひとりのニーズを正確に把握し、教育の視点から適切に対応するという考えの下、長期的な視点で乳幼児期から学校卒業後まで一貫して的確な教育的支援を行うことを目的とするもの。高校についても、新学習指導要領の総則において、個別の教育支援計画及び個別の指導計画の作成・活用が明記された。

これからの
進路指導のための
世の中トレンド解説

生徒の学びや進路選択、その後の人生に影響を与えるような革新的な技術や価値観を「社会のトレンド」として解説します。

トレンド・ワード

リスキリング

急速なDXを背景に、「学び足し」が不可欠な時代

近年、「リスキリング」が世界的に注目されています。その言葉は、社会や技術の変化に適応するために、職務上必要なスキルを習得することを意味します。今持っているスキルを磨き続けながら、＋αの新たなスキルを身につけるといった意味合いが強く、「学び直し」（A→A′）ではなく、「学び足し」（A→A′＋α）と捉えられます。

これまで耳にすることが多かった「リカレント教育」は、個人が人生を豊かにするために学び続けることを意味します。一方、リスキリングは、企業などの組織が戦略的に社員に学びを促すといった、組織主導の文脈で用いられることが一般的です（**図**）。ただ、それだけではなく、個人が自己をブランド化する観点からスキルを身につけてキャリアアップを図ることも、リスキリングの一環として捉えてよいでしょう。

リスキリングが重要視される背景には、ＤＸ（デジタルトランスフォーメーション）の急速な進展があります。あらゆる業種の仕事がデジタルに置き換わる中で、一部の技術者だけではなく、誰にとっても、デジタルツールを使いこなすスキルやリテラシーが必須になってきています。コロナ禍の影響でリモートワークが一般化したことなどを受け、その流れは一層強まっています。リスキリングは、分野を限定したものではありませんが、特にデジタル関連の分野で注目されています。

図　「リカレント教育」と「リスキリング」の違い

	リカレント教育	リスキリング
学習目的	生涯教育	職業で価値創出し続けるためのスキル・知識の習得
学習内容	人生を豊かにする学び	実践的・実用的スキル・知識（特にデジタル関連）
推進主体	個人	企業主導

※飯田氏の提供資料を基に編集部で作成。

「最新学習歴」をより誇れる社会に

リスキリングは、企業で働く人だけに求められているわけではありません。経済産業省では、国際競争力の向上を図るべく、ＤＸ推進を担う人材の役割や必要なスキルを定義した「デジタルスキル標準」を策定し、リスキリングの重要性を訴えています。さらに、地域住民へのサービスの向上を目的として、リスキリングに取り組む自治体も増えてきました。教育現場でデータの利活用が進むにつれて、教師にもリスキリングが一層求められるようになるでしょう。デジタルツールを活用して校務を効率化し、生徒の学びを多様なデータによって可視化して、新たな教育を創造するためには、従来とは異なるスキルが必要になるはずです。

なお、ベネッセの調査では、社会人の４割が、「社会人になって以降、学んだ経験がなく、今後１年以内に学ぶ意向もない」と、回答しています（＊１）。その背景には、個人の課題に限らず、働きながら学ぶ環境が整っていないことや、学びがキャリアに直結しづらいといった社会的要因もあると考えられます。近年、働きながら学べるツールの１つとして、時間や場所を選ばずに受講できるオンライン講座が増えています。「教えたい人」が講座を開き、「学びたい人」が自由に受講できる動画学習プラットフォーム「Udemy」（＊２）もその１つで、リスキリングに活用する企業や自治体、学校が増えています。

社会人が学び続けるためには、学びやすい環境とともに、社会全体が学びに価値を置き、学び続ける人を応援し合える「ラーニングカルチャー」を形成することも大切です。学びは、キャリアや人生を豊かにする資産であり、一人ひとりが自分らしく、やりがいを持って働くことができる「よく生きる」社会を実現するための支えにもなるものだと考えています。今後は、誰もが学ぶことで輝くチャンスがあり、「最新学習歴」をより誇れる社会になっていくのではないでしょうか。リスキリングが、そうした社会の実現へ向けた後押しになることを願っています。

解説者
株式会社ベネッセコーポレーション
社会人教育事業部 部長
Udemy 日本事業責任者
飯田智紀 いいだ・とものり
ソフトバンクグループ株式会社で経営企画・グループ会社管理などに従事後、現職。

VIEWnext ONLINE では、トレンド・ワードについて、誌面でお伝えし切れなかった内容を「学ぶ・働く・暮らす」の切り口で解説しています。右記の２次元コードを読み込み、またはクリックしてアクセスし、ご覧ください。

＊１（株）ベネッセコーポレーション「社会人の学びに関する意識調査 2022」。　＊２ 最先端の IT スキルやビジネススキルなど、幅広い講座を提供しており、講座数は 20 万以上。１つの講座の中に短い動画がカリキュラム形式に組まれており、各動画は約５～ 10 分で視聴が可能。世界では 5,900 万人以上、日本では 110 万人以上の利用者がおり、法人領域では、国内 1,000 社以上に導入されている。（株）ベネッセコーポレーションは、日本における Udemy 社の独占的事業パートナーである。
※プロフィール、及び「Udemy」の概要は、2023 年３月時点のものです。

For Teacher Section

教師個々の教科指導・進路指導に
役立つ事例や情報を、
先生方の思いを乗せてお届けする

P.42

発問・課題設定をキーに見る
主体的・対話的で深い学び
授業実践

教科の見方・考え方を働かせる
問いや課題を通じて学びが深まる授業に迫る

お勧めの分掌▶ 教務担当 担任

歴史総合
茨城県・私立
東洋大学附属牛久中学校・高校　本保泰良（ほんぼたいら） P.42

歴史的事象の本質に迫る「問い」で、
多面的な見方と未来を志向する力を養う

英語
神奈川県立川和高校　福田理奈 P.46

「総合的な探究の時間」と連携し、
課題解決型学習の成果を英語で発信

P.50

マイ・ストーリーを語れる
生徒を育む進路指導

これまでの自分と将来の自分を、
大学での学びと結びつけて語れる生徒を育む

お勧めの分掌▶ 進路担当 学年団 担任

1年次　マイ・ストーリーを語るための土台づくり
宮崎県立宮崎東高校　定時制課程夜間部

「自分を知る」探究学習を通して
自己肯定感を育み、進路を拓く

P.52

変化の激しい社会に飛び込む生徒に伴走
クローズアップ! 就職指導

社会や企業が変化する中、
就職活動を頑張る生徒をどう支援するか

お勧めの分掌▶ 進路担当 学年団 担任

働き続けるための資質・能力の育成
全学年

社会で求められる学びの羅針盤を策定
石川県立小松工業高校

発問・課題設定をキーに見る

主体的・対話的で深い学び

授業実践

歴史総合

歴史的事象の本質に迫る「問い」で、多面的な見方と未来を志向する力を養う

茨城県・私立東洋大学附属牛久中学校・高校　本保泰良

本時の概要

［対象／教科／科目］1年生／地理歴史／歴史総合　［分野・単元］第2次世界大戦と太平洋戦争（全2時間のうちの2時間目。P.45に単元の指導計画を掲載）
［育成を目指す資質・能力］知識、技能、思考力、表現力、主体性、協働性
［学習内容］「なぜ、アメリカは日本に原子爆弾を投下したのか」を本時の課題として提示し、まず、サイパン島の陥落や、戦後の米ソ関係などの歴史的事実を、生徒に問いかけながら確認した。それを踏まえて課題を個人で考えた後、グループで議論した上で、生徒は考えをワークシートにまとめた。

主 主体的な学び
対 対話的な学び
深 深い学び

11:55 前時の復習と、本時の課題の提示

本保先生は、前時の課題「なぜ、ドイツは戦争（第2次世界大戦）を開始したのか」を簡潔に振り返り、本時の課題「なぜ、アメリカは日本に原子爆弾を投下したのか」を提示。「一般的には、アメリカ国民を守るためと言われているが、別の見方もあるのではないか」と、生徒に問いかけた。

12:18 「原爆投下」までの事実の確認

サイパン島の陥落後の情勢について、本保先生が問いかけ、生徒がそれに答える形で事実を確認していった。「なぜ、東京大空襲は3月だったのか」「なぜ、大本営発表は被害を過小に伝えたのか」「国民の立場ならどう感じるか」などと、生徒が様々な立場から考えられるような問いを投げかけた。

ほんぽ・たいら　教職歴23年。同校に赴任して24年目。進路指導部。地理歴史・公民科。著書に、『書いて深める日本史　思考して表現する記述問題集』（山川出版社）。

学校概要

◎「諸学の基礎は哲学にあり」「独立自活」「知徳兼全」を建学の精神とする。グローバル人材の育成を目指し、「総合的な探究の時間」に「哲学」「教養」「国際理解」「キャリア」「課題研究」の5科目から成る「グローバル探究」を独自設定教科として実施している。
◎設立　1964（昭和39）年
◎形態　全日制／普通科／共学
◎生徒数　1学年約590人（高校）
◎2022年度入試合格実績（現浪計）　国公立大は、北海道大、茨城大、筑波大、千葉大、電気通信大、茨城県立医療大などに22人が合格。私立大は、青山学院大、学習院大、上智大、中央大、東京理科大、東洋大、法政大、明治大、立教大、早稲田大、同志社大などに延べ861人が合格。

※プロフィールは、2023年3月時点のものです。

12:05 「サイパン島の陥落」の影響を考える 3

「サイパン島の陥落」の影響について、生徒は個々に考えたことをノートに記入し、それをグループで共有した。その間、本保先生は、教室を回りながら、B29 の航続距離や学童疎開の開始などについて説明し、サイパン島の陥落が本土爆撃の契機となり、日本の敗戦につながることに気づかせた。

11:57 「日米開戦」までの事実を確認 2

「日本にとってアメリカはどんな存在？」「なぜ、日本は北部仏印に進駐した？」などと、本保先生が生徒に問いを投げかけ、「貿易相手」「資源を得るため」などと生徒が答えるやり取りをしながら、課題を考える手がかりとなる、日米開戦までの日本とアメリカの動きを整理した。

本時のキー課題

12:38 グループで議論後、ワークシートに記入 6

本保先生からのヒントや、インターネットで調べた情報を踏まえて、本時の課題についてグループで議論。生徒はさらに考えを深めて、ワークシートを完成させた。「制限時間内で書く」という方針の下、書き終えていない生徒も含めて、授業終了時に、全員がワークシートを提出した。

本時のキー課題

12:28 「原爆投下」の理由を個人で考える 5

生徒は、本時の課題「なぜ、アメリカは日本に原子爆弾を投下したのか」を考え、ワークシート（P.44 図）に記入。本保先生は、「なぜ、ソ連は広島の原子爆弾投下後に参戦した？」「冷戦はどの国が争った？」などと問いかけ、生徒が戦後の状況を踏まえて課題を考えられるように促した。

●私が目指す授業

「過去」を「今」につなげる、「なぜ」を重視した授業に転換

かつての私は、大学入試を意識して、教科書の内容を分かりやすく解説するのがよい授業なのだと考え、実践していました。しかし、授業アンケートで、「先生の授業は分かりやすいけれど、テストでは点数が取れない」といった指摘を受け、生徒が歴史的事象が起きた理由などの「本質」を理解できるような授業をしていないことに気づきました。

その頃から、問いを中心にした授業を追究してきました。「なぜ」と問題意識を持つことができれば、生徒は自分の頭で考え、教科書やインターネットで必要な情報を主体的に探します。問いの答えを考え抜くことは、知識の定着につながると同時に、今後の社会でも求められる姿勢を培うことにもなると考えました。

歴史的事象を、「過去」のものとしてだけではなく、「今」につなげ、そこから何が学べるのかを生徒に考えさせることも大切にしています。支配者が民衆を締めつければ、反撃を受けます。一方、あまりに統制さ

れなければ、民衆はやりたい放題になります。そうした歴史の教訓を、例えば、自分がリーダーになった時に置き換えて捉えられるようにしています。「歴史総合」が扱う近現代は、現在の国際社会が抱える諸問題と深くかかわっており、生徒が自分の未来を志向する力を養える科目だと考えています。

●私の発問・課題設定の観点

多面的に見る目を養える授業を貫く課題を設定

現在の授業は、授業を貫く課題を設定し、それを考えるための歴史的事象を生徒に問いかけたり、グループで話し合って自分の考えを再構築したりする構成にしています。

第2次世界大戦を扱った前時では、「なぜ、ドイツは戦争を開始したのか」を課題にしました。第2次世界大戦の責任はドイツにあるというのが定説です。しかし、ヴェルサイユ条約で厳しい条件をのませてドイツを追い詰めた、イギリスやフランスにも問題があったのではないかといった見方もあります。歴史的事象は、立場によっては、常識や定説とは異なる見方が成り立つということを、生徒が実感できる課題にするよう心がけています。

本時の課題とした原子爆弾投下の理由も、アメリカは自国民を守るためとしていますが、ソ連との対立を視野に、戦後社会での覇権を握るねらいもあったのではないかとも言われています。授業の前半で、日米開戦の経緯や、本土爆撃の契機となったサイパン島の陥落による影響など、歴史的事象を整理して、課題について考えられるようにしました。

本時の課題をより深く考えるためには、戦後の米ソ対立を踏まえて、原子爆弾投下の意味を捉えることがポイントとなります。そこで、単元の順序を変えて、第2次世界大戦の前に戦後史を扱いました。

生徒が自ら答えを導けるよう、問いの形でヒントを提示

授業ではまず、課題について個人で考えさせてから、「アメリカはどの国を意識していた？」などと、考えを深めるヒントとなる問いを投げかけます。次に、グループで各自の考えを共有し、他者の気づきや着眼点を得られるようにしています。それによって、自分の考えを磨いた上で最終的に自力で答えを出すことができ、生徒の達成感や自己肯定感がより高まると考えています。

課題について自分の考えを記入するワークシート（図）は、大学入試を見据え、制限時間を意識して書かせ、記入が途中でも授業終了時に提出させています。課題のいくつかは定期考査でも出題するので、ワークシートの返却後、自分で答えを完成させるよう、生徒に伝えています。模範解答は示していません。課題について主体的に考えようとしない状況になることを避けるためです。

課題を考えるために必要な歴史的事象は、生徒に問いかけて確認するようにしており、生徒には、予習として教科書を読んでくるように伝えています。年度当初は、「発言するのは恥ずかしい」、「間違ったらどうしよう」といった気持ちがあるからか、問いかけに答える生徒はほとんどいませんでした。「少しでもよいから声を出そう」、「間違っても大丈夫。分からないことがあったら質問して」などと声をかけていくことで、次第に生徒は発言するようになり、予習の習慣も定着してきました。今では、クラス全体から、私の問いかけに対して自然と声が上がります。

以前は、設定した課題が漠然としていて、生徒が何を答えてよいか分からなかったり、課題を考えるための知識が足りずに、考えを深められ

図　本時のワークシート（生徒の記入例）

アメリカは、人類史上初めて２発の原子爆弾を、1945（昭和20）年８月６日広島、８月９日長崎にそれぞれ投下した。アメリカはなぜ原子爆弾を投下したのだろうか。戦後の国際社会がどのような対立を軸に展開されていったのかという観点から考えて、文頭・文末に合うように説明しなさい。

＜ヒント＞

・ソ連は広島に原子爆弾が投下されたのち、日ソ中立条約を無視して対日参戦した。

・戦後の国際社会は、資本主義陣営と共産主義陣営に分かれ、冷戦と呼ばれる対立が起こった。

第二次世界大戦末期には、アメリカとソ連の戦いが始まっていた。アメリカは日本に原子爆弾を落としたが、これはソ連または共産主義側への見せつけである。また、ソ連は日本が原子爆弾を落としたしゅん間をねらって北方領土をうばおうとしていたという

目的があったのではないかと考えられる。

本時の課題「アメリカが日本に原子爆弾を投下した理由」について、ソ連に対する威嚇だったという視点を盛り込み、なおかつ北方領土の不法占拠にまで言及した生徒もいた。加筆した箇所があるなど、グループでの話し合いで考えを深めた様子がうかがえる。　※学校資料をそのまま掲載。

なかったりすることがありました。その経験から、各単元で学ぶべき本質を熟考した上で、生徒が意味のあるものとして自分で考え、答えを導き出せるような課題を設定し、そこから逆算して単元計画を練るようになりました。そして、授業時間内に生徒がゴールにたどり着くよう、教科書を基に、必要な知識や考える視点をまとめたスライド(＊)を作成し、それに従って授業を進めています。

当初は、1時間の授業の準備に7時間ほどかかっていました。要領が分かってきた今でも、「この課題は、考える意味があるか」と、生徒に聞きながら、試行錯誤を続けています。

定期考査では、「知識・技能」の観点で評価する問題と、「思考・判断・表現」の観点で評価する問題を、均等に出題しています。「思考・判断・表現」の観点で評価する問題は論述式で、どの生徒も、回を重ねるごとに記述量が増え、自分の言葉で記述できるようになっていきます。

ただ、まだ受け身の生徒が一定数いるのも事実です。生徒一人ひとりの興味を刺激する魅力的な課題を設定し、すべての生徒が前のめりに積極的に発言する授業を実現することが、今後の目標です。未来は誰にも分かりませんが、過去から学ぶことはできます。生徒が歴史から学び、将来を切り開いていく力を育む授業を、これからも模索していきます。

●成果と展望

歴史の教訓を踏まえて、将来を展望する生徒たち

現在の授業形態にしてから、生徒が意欲的に授業に取り組むようになってきました。授業アンケートで、「歴史の授業が、日本の発展のために何をすべきかを考えるきっかけになった」と回答した生徒もいました。歴史の教訓を人生に生かそうとする生徒の姿を心強く感じています。

VIEWnext ONLINEでは、本時の授業の様子をダイジェスト動画で紹介!

VIEWnext ONLINE 検索

単元の指導計画

【教科・科目】地理歴史・歴史総合 【分野・単元】第2次世界大戦と太平洋戦争 【テーマ・作品】第2次世界大戦における各国の思惑と、戦後社会を見据えた米ソの動向について 【設定時数】全2時間（本時は2時間目） 【単元目標】歴史を多面的・多角的に理解する力を身につける

時数	学習内容	身につけさせたい資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	第2次世界大戦	• 国際連盟発足からわずか20年で世界大戦が起こった理由について、過去の学習内容を参考にして自分の言葉で説明できる。 • 敵対関係であったドイツとソ連が不可侵条約を結んだ理由を、ドイツ・ソ連それぞれの立場から説明できる。 【知識、技能、思考力、表現力、主体性、協働性】	①第1次世界大戦後のドイツの立場を理解した上で、その後のドイツの動きを確認する。 ②国際連盟とドイツの関係を捉えて、平和な時代が短期間で終わった理由を考える。 ③ドイツとソ連の関係を概観し、不可侵条約締結から独ソ開戦の流れを理解する。 ④アメリカで成立した武器貸与法や大西洋憲章の発表が、戦況にどう影響したかを考える。	【主体的な学び】• 教科書を深く読み込むための補助となるスライドを通じて、考えるように伝える。• 生徒が教科書を使って自分の力で考えられるよう、歴史的背景を説明する。 【対話的な学び】• 1人で考える時間を設け、自分の考えを持ってから、グループディスカッションを行う。• 議論が深まっていないグループに、ヒントとなる助言をする。 【深い学び】•「第1次世界大戦後の国際社会では、なぜ、平和が長く続かなかったのか」「なぜ、ドイツは独ソ不可侵条約を結んだのか」という問いを織り交ぜて、思考の深化を図る。	• ノートに記述した問いの答え • グループディスカッションの参加状況
2	太平洋戦争	• 日本にとって、アメリカはどのような存在だったのかを、貿易の観点から説明できる。 • マリアナ諸島のサイパン島の陥落が、その後の日本に及ぼした影響について説明できる。 • アメリカが日本に原子爆弾を投下した理由（仮説）について、戦後社会の展開を踏まえて説明できる。 【知識、技能、思考力、表現力、主体性、協働性】	①日本にとって、貿易上、アメリカがどのような存在だったかを考える。 ②日本の軍事行動に対してアメリカが経済制裁を行う中、日本では戦争に向けた準備と同時に、日米交渉が進められた事実を確認する。 ③太平洋戦争が始まり、日本が劣勢となる中でのサイパン島の陥落が、何を意味するのかを考える。 ④アメリカが原子爆弾を投下した理由を、戦後社会と関連させて考える。 ⑤ワークシートに取り組む。	【主体的な学び】• 教科書を深く読み込むための補助となるスライドを通じて、考えるように伝える。• 生徒が教科書を使って自分の力で考えられるよう、歴史的背景を説明する。 【対話的な学び】• 1人で考える時間を設け、自分の考えを持ってから、グループディスカッションを行う。• 議論が深まっていないグループに、ヒントとなる助言をする。 【深い学び】•「なぜ、アメリカは日本に原子爆弾を投下したのか」を最終的な問いとし、そこに至る過程として、日本とアメリカの関係、戦後社会との関連を示して、問いの答えを考えられるようにする。	• ノートに記述した問いの答え • グループディスカッションの参加状況 • ワークシート

※本保先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。

＊ 本保先生作成の授業スライドは、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』（https://view-next.benesse.jp/）からダウンロードできます。「Top →学校教育情報誌『VIEW next』→高校版バックナンバー」でご覧ください。

発問・課題設定をキーに見る

主体的・対話的で深い学び

授業実践

英語

「総合的な探究の時間」と連携し、課題解決型学習の成果を英語で発信

神奈川県立川和高校　福田理奈

本時の概要

［対象／教科／科目］2年生／英語／コミュニケーション英語Ⅱ ［分野・単元］Lesson5 Designed to Change the World（全17時間のうちの16・17時間目。P.49に単元の指導計画を掲載）
［育成を目指す資質・能力］判断力、主体性、協働性
［学習内容］貧困層の支援がテーマの英語の単元を踏まえて、「総合的な探究の時間」で、貧困層向けの製品・サービスの企画・提案に取り組んだ。そして、英語の授業では、その提案を英語でスライドにまとめ、前時に各クラスで発表会を、本時に各クラスの代表チームによる学年発表会を行った。

主 主体的な学び
対 対話的な学び
深 深い学び

1　8:55 開会式

本時は、学年発表会を体育館で行った。発表者は、前時に行った各クラスでの発表会で選出された8チーム。福田先生が、開会の挨拶と、連携企業から招いた審査員の紹介を英語で行い、プレゼンテーションの評価方法を説明。「Are you excited?」の問いかけに、生徒からは歓声が上がった。

4　10:15 投票・結果発表

全チームの発表が終わると、生徒は自分のスマートフォンを使って、オンラインのアンケートフォームから、最もよいと思ったビジネスプランを発表したチームに投票。集計の結果、雇用率の低いコートジボワールへの保育園の設置を提案した2年6組のチームが優勝した。

ふくだ・りな　教職歴10年。同校に赴任して3年目。進路支援グループ。外国語科（英語）。同校赴任を機に、英語の授業で課題解決型学習を実施。

学校概要

◎校訓は、「誠実」「勤勉」「質朴」。学校のミッションに、「多様な分野でリーダーシップを発揮し、堅実に社会に貢献できる人材の育成をめざし、健やかな体、たくましい精神力及び思いやりを育む教育に取り組む」ことを掲げる。2021年度から、神奈川県教育委員会「学力向上進学重点校」の指定校。
◎設立　1962（昭和37）年
◎形態　全日制／普通科／共学
◎生徒数　1学年約320人
◎2022年度入試合格実績（現役のみ）　国公立大は、北海道大、東北大、東京工業大、東京大、一橋大、横浜国立大、名古屋大、京都大、大阪大、横浜市立大などに85人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、上智大、中央大、東京理科大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ1,115人が合格。

※プロフィールは、2023年3月時点のものです。

本時のキー課題

9:00 英語でプレゼンテーション 2

１チーム８分間で、英語でビジネスプランのプレゼンテーションを行った。プレゼン項目は、対象の国・地域の課題、事業計画、セールスポイントなど。最初に数字を挙げ、「何の数字か分かりますか」と聴衆に問いかけたり、身振り手振りを交えたりと、それぞれが聴衆を引きつける工夫をしていた。

9:42 プレゼンテーションを評価 3

聴衆の生徒は、発表者とアイコンタクトを取れるよう、顔を上げて聴いていた。そして、各チームの発表が終わる度に、提案内容の中でよいと思った点や気になった点などを、ワークシートに書き留めた。日本語での記入も可としたが、多くの生徒が英語で記入していた。

10:25 審査員の講評 5

審査員を務めた日本政策金融公庫の社員が講評を行った。英語の発音や論理的な説明に加え、多くのチームが、コストを抑え、販売量を増やす現実的なプランを提案していた点を高く評価した。そして、今回関心を持った課題をさらに深く掘り下げていってほしいと、生徒にエールを送った。

10:40 単元の振り返り 6

「総合的な探究の時間」で取り組んだ探究学習と、英語の授業で取り組んだ発表活動を振り返った。「世界には多くの低所得層がいて、多様な課題があることが分かった」「英語のプレゼンスキルが向上した」などと、探究学習と英語の双方について、自身の成長や気づきをワークシートに記入した。

●私が目指す授業

自分の意見を持てるように、実社会の課題に取り組む

私は、「学校で学ぶ意味は何か」をずっと考えてきました。特に、コロナ禍による２０２０年度の臨時休業時は、オンライン授業や課題の配信を行う中で、これで生徒が学べるのならば、学校は必要ないのではないかと思うこともありました。休業明けに、授業で生徒が英語を楽しそうに話す姿を見て、学校で学ぶ意味を感じられましたが、それでも何かが足りない気がしていたのです。

本校の生徒は真面目で、学力が高く、コミュニケーション力も備えています。ただ一方で、自分の意見を言えない生徒が少なくありませんでした。「あなたはどう考えますか」といった問いかけに、口を閉ざしてしまう生徒もいます。

これからの時代は、新しい価値を生み出す創造性や社会を切り開く貪欲さが求められます。そうした創造性や貪欲さは、自分の意見を相手に伝えたいという意志の強さによって形成されるのではないかと思いました。そこで考えたのが、英語の授

業で課題解決型学習を行うことです。実社会にある問題を提示し、その解決策を考え、発信する場があれば、生徒は当事者意識を高め、自分の意見を持つようになるのではないか。そうした学びを提供することこそが、教師の役割だと考えたのです。

●私の発問・課題設定の観点

単元の趣旨を踏まえた課題を探究し、英語で表現

私は、「コミュニケーション英語Ⅱ」の各単元で、課題解決型学習を単元のゴールに設定しています。授業ではまず、単元の素材文の音読や読解、新出単語や文法の確認、サマリーの作成、ペアでの対話活動などを行います。その上で、私が単元の趣旨を踏まえて提示した課題について、生徒は自分の関心に応じて調べ、まとめた提案を英語で発表します。

例えば、自然と人間の共生がテーマの単元では、絶滅危惧種の動物をかたどったお菓子を企画してメーカーに提案することを課題にしました。どのチームも、その動物を選んだ理由や、動物の保護に必要なことをお菓子の企画に込めていました。

年度末には、1年間の集大成として、外部機関と連携し、その担当者が審査員等として参加する学年発表会を行っています。20年度は、株式会社ユーグレナ創業者の取り組みがテーマの単元を基に、ミドリムシを活用した新商品の考案を課題としました。生徒は、栄養問題を抱える途上国向けに、その国の現状や食文化にあった商品を企画し、発表会では、実際に途上国の栄養問題解決に取り組むユーグレナ社に提案しました。

21年度は、食の多様性に対応した弁当の企画を課題とし、オリジン東秀株式会社の開発担当者を審査員に招いた発表会を行いました。一連の取り組みはテーブルテレビに取り上げられ、同社が試作したベストチームの弁当が番組内で披露されました。

総合探究と連携し、英語の授業は英語のプレゼンスキル向上に特化

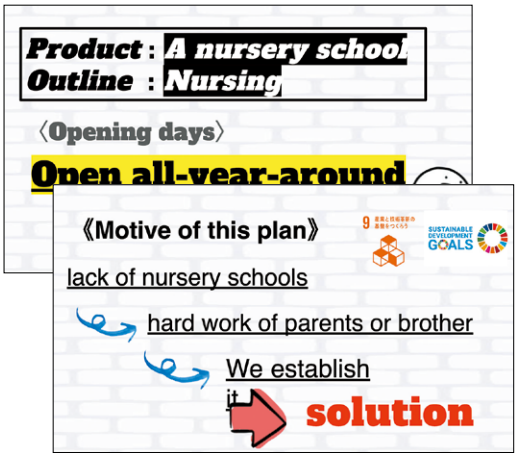
本時に行ったのは、貧困層の支援がテーマの単元を基に企画した「BOP（＊1）ビジネスプランプロジェクト」の発表会でした。生徒は、「世界のデザイナーの95％が、世界人口の10％の富裕層のための製品をデザインしている。残り90％の貧困層の生活をよくする製品のデザインが必要」といった素材文のメッセージを踏まえて、自分たちなら、どの国・地域に対し、どんな製品・サービスを提供することで問題解決を図るのか、ビジネスとして成り立つプランを実際に考える課題に取り組み、その成果を発表しました。

生徒の本気度を高めようと、株式会社日本政策金融公庫が無料で行う出張授業に申し込み、同社の社員を講師に迎えたビジネスプランの作成の授業を行いました。さらに、講師を本時の発表会に招き、講評してもらうことにしました（＊2）。

そして、「総合的な探究の時間」（以下、総合探究）と連携して単元計画を練りました。総合探究では、SDGsの学習やビジネスプランの作成、日本語でのプレゼンテーションを行い、英語の授業では、日本語で行ったプレゼンテーションの英語版を作成。英語による発表ならではの間の取り方やアイコンタクト、ジェスチャーなど、聞き手に伝えるためのスキルの練習を重ねました。

総合探究の授業では、提案の内容は優れているのに表現力が伴わず、うまく伝えることができていない生徒にもどかしさを感じる場面もありました。そこで、英語の授業では、聞き手の心に響く伝え方として、「グッド・スタート」「グッド・スク

図　生徒が作成した発表スライド



優勝チームは、コートジボワールで展開する「年中無休の保育園」を提案した。スライドには、キーワードが分かりやすく配置されている。メンバーは、「プレゼンの準備では、聴衆を引きつける表現や演出を意識してリハーサルを重ねました。互いのスピーチを聞き合い、発音は正しいか、スピードは速すぎないか、意見を出し合いながらスキルを高めていきました」と語った。ほかのチームからは、「設置容易な浄水濾過装置（ソロモン諸島）」「読み書き計算の基礎が学べる教科書（マダガスカル）」「地元産カカオを利用した料理教室（ガーナ）」などが提案された。

※学校資料をそのまま掲載。

＊1　Base of the Economic Pyramid の略称で、低所得層のこと。　＊2　株式会社日本政策金融公庫は、高校生のビジネスプランを競う全国規模の大会「高校生ビジネスプラン・グランプリ」を開催しており、大会に参加する生徒への支援として、社員が学校を訪問してビジネスプランの作成をサポートする出張授業を無料で実施している。詳しくは、同社のウェブサイト（https://www.jfc.go.jp/n/grandprix/index.html）をご覧ください。

リプト」「グッド・スライド」の3Sが重要であると伝えました。すると、どのチームも、フレーズをシンプルにし、発表のスライドでは写真やイラストを多用するなど、それぞれに工夫を凝らしていました（図）。

グッド・スタートについては、優勝チームの演出が見事でした。プレゼンの序盤に聴衆に問いかけたのですが、生徒が反応する前に、会場にいた担任が突然発表者に駆け寄り、大声で答えました。教師を巻き込んだサプライズ演出に聴衆は大いに盛り上がり、その後のプレゼンをより集中して聞いていました。

それらのスキルは、通常の授業でも身につけることができるかもしれません。しかし、自分が関心を持って追究した課題の成果発表だからこそ、生徒はより伝わる方法を考え、スキルを身につけたのだと思います。

●成果と展望

普段から積極的に発言する生徒が増え、英語力も向上

自分の意見を積極的に発言する生徒も増えており、2年生が受検した英語4技能検定「GTEC」のスピーキングの観点別採点を見ても、多くの生徒が、意見や理由を聞き手に伝えることができていました。

スキルの面でも、発表時の声の大きさや話すスピードが改善し、当初は半分以下だったアイコンタクトも、8割以上の生徒ができるようになりました。重要な発言の前には一呼吸のためをつくるなど、間を取る工夫も多くの生徒が行っています。

課題解決型学習は、課題設定や資料作成など、準備に時間がかかり、発表時間を確保する必要もあります。英語力向上に必要となる様々な活動をバランスよく行いながら、生徒が社会とのつながりや社会への貢献を実感できる授業のあり方を、これからも模索していきたいと思います。

VIEWnext ONLINEでは、本時の授業の様子をダイジェスト動画で紹介！

VIEWnext ONLINE 検索

単元の指導計画

【教科・科目】英語・コミュニケーション英語Ⅱ 【分野・単元】Lesson 5・Desigened to Change the World 【テーマ・作品】世界を変えるデザインを考える 【設定時数】全17時間（本時は16・17時間目）【単元目標】海外の貧困層を対象としたビジネスプランを考えて、プレゼンテーションする

時数	学習内容	身につけさせたい資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	導入、Part 1の読解、表現活動	単元のゴールの課題を理解しようと、意欲を持ってリーディング・リスニングに挑戦することができる【知識、技能】	①ウォームアップ、ペアトーク ② Part 1を読解する ③新出単語の確認 ④ TED（プレゼンテーション動画）を視聴し、Paul Polakのメッセージを読み取る ⑤単元のゴールの課題を提示	【主体的な学び】本文読解と動画の視聴を組み合わせて、生徒の興味・関心を喚起する	活動の取り組み状況
2・3	Part 2の読解、表現活動	主体的に本文を読み、理解した内容を基に表現することができる【表現力、主体性】	①ウォームアップ、ペアトーク ②新出単語の確認 ③ Part 2のリスニング・リーディングを行い、サマリーノートを作成する ④関連する英文を読解する ⑤ミニ・課題：Qドラム（本文に登場する製品）の新しいデザインを提案する	【深い学び】本文に登場するQドラムについて、自分でデザインを考えることで、課題意識を高める	
14・15	クラス内プレゼンテーション	発表者：効果的なプレゼンテーションをすることができる 参加者：アクティブ・リスニングをすることができる【判断力、主体性、協働性】	①各チーム7～8分間でプレゼンテーションを行う ②生徒の投票によってベストチームを選出し、表彰	【主体的な学び】発表者は伝えようという思いを込めて発表し、聞く側の生徒は発表しやすい雰囲気づくりに努めるよう指導する	パフォーマンステスト
16・17	クラス代表プレゼンテーション	発表者：効果的なプレゼンテーションをすることができる 参加者：アクティブ・リスニングをすることができる【判断力、主体性、協働性】	①各クラスの代表の8チームがプレゼンテーションを行う ②企業担当者の講評 ③投票、結果発表 ④単元の振り返り	【深い学び】単元での学びを振り返り、得た知識をつなげながら、発表したり、発表を聞いたりするよう指導する	活動の取り組み状況

※福田先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。単元の指導計画の全17時間分は、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』（https://view-next.benesse.jp/）からダウンロードできます。「TOP →学校教育情報誌『VIEW next』→高校版バックナンバー」でご覧ください。

「マイ・ストーリー」を描き、それを語れる力が、これからの大学入試で希望進路を実現するために必要とされることを検証し、そうした力を生徒に育む教師の指導や支援のあり方・方法を、実践事例を通じてお伝えしたVIEWnext高校版2021年8月号・特集はこちら▶

マイ・ストーリーを語れる生徒を育む進路指導

「マイ・ストーリー」とは、生徒一人ひとりの「自分のこれまでの学びや活動、その成果や結果に至るまでのプロセス、これからの展望」を指す。
総合型選抜や学校推薦型選抜（以下、推薦型選抜）を始めとするこれからの大学入試に向けて、「マイ・ストーリー」を描き、それを語れる力を生徒に育む実践事例を紹介する。

1年次

マイ・ストーリーを語るための土台づくり

「自分を知る」探究学習を通して自己肯定感を育み、進路を拓く

宮崎県立宮崎東高校　定時制課程夜間部

マイ・ストーリー 1年次の課題

- 中学校までに様々な問題に直面してきた生徒の自己肯定感を高め、社会性を育む
- 進路目標を具体化していくために、自分の興味のあるテーマを掘り下げ、さらにその視野を社会、進路へと広げていく

「総合的な探究の時間」で生きがいを見つけさせる

宮崎県立宮崎東高校定時制課程夜間部には、過去に不登校を経験した生徒や、義務教育段階での基礎学力が身についていない生徒、人前で話したり、他者と協働したりすることが苦手な生徒が少なからず入学してくる。同校の教師たちにとって、生徒が4年間の教育課程を無事に修了することが最大の目標であり、進路指導までは十分手をかけられず、かつては大半の卒業生の進路が、在学中のアルバイトの継続という時期もあったという。

そうした生徒たちが、「総合的な探究の時間」を通じて「生きがい」を見つけ、納得いく進路を切り拓く力を身につける取り組みが始まっている。西山正三（まさみ）先生は、「総合的な探究の時間」を、生徒に不足している経験を取り戻し、「マイ・ストーリー」を語れるようになるための土台を築く場だと説明する。

「不登校などの事情によって、生徒は自己肯定感が十分に育まれておらず、実社会に対する知識も不足しています。『総合的な探究の時間』を通して、同級生や様々な社会人と接し、実社会に触れ、自分を掘り下げる中で、生きがいを見つけさせたいと考えました」

探究学習のサイクルを回す中で、大きく成長する生徒たち

「総合的な探究の時間」は週1コマで、4年間を通じて実施される（図）。すべての年次で、①課題の設定から、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現までの探究学習のサイクルが回されている。

1年次の「自分を知る」は、4年間の探究学習のスタートとして、生徒にとって特に重要な活動であり、特に①の課題の設定に力を割く。前期は、マインドマップなどを使って自己分析を行い、興味・関心を掘り下げる。

「最初は自己分析をほとんど書けない生徒もいますが、何か1つでも書けていればそれを褒め、もう1つ何か書いてみようと声をかけます。『1つしか書けていない』ではなく、『1つ書けている』ことを認めることで、この時間は安心・安全が保証されていることを生徒は理解します。その後の活動において生徒が自分のことを表現していくためにも、教師が生徒に対して寛容であることが重要です」

答えが1つとは限らないテーマについて語り合う「哲学対話（＊1）」にも取り組む。

「最初から全員が活発に意見を言うわけではありませんが、自由に自分の考えを語ってよい場であることが分かると、生徒たちは次第に話をし始め、互いに心を開いていきます。他者の意見を聞いたり、自分の意見を聞いてもらったりする中で充実感を味わい、いろい

＊1　哲学対話については、『VIEW21』高校版2020年度4月号・特集「『あり方・生き方』を考える」P.26～27をご覧ください。
＊2　ベネッセのアセスメント「進路マップ」の1つで、義務教育範囲も含めた基礎学力を測るマーク式テスト。

宮崎県立宮崎東高校 定時制課程夜間部の探究学習

1年次 自分を知る

自分の興味・関心を探り、自分について理解を深めることを目標とする。思考ツールを使った自己分析や、哲学対話などを経て、自分の興味のあるテーマについての考察をスライドにまとめて発表する。

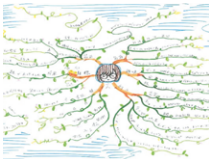
2・3年次 社会を知る

「自分」から「社会」へと視野を外に広げ、自由にテーマを設定し、探究学習に取り組む。

3・4年次 進路を知る

自分の興味・関心などを踏まえて、今後の進路を考える。面接や志望理由書の指導も行う。

マンダラートやマインドマップで自分を掘り下げる



1学期の探究学習の多くは、思考ツールを使った自己分析に充てる。じっくりと自分と向き合わせることで、少しずつ自分の興味・関心を言語化できるようになる。

専門家を招いた哲学対話を開催

東京大学大学院総合文化研究科の梶谷真司教授をファシリテーターに招いた哲学対話を例年実施。22年度はオンラインで3コマ、対面で1コマ開催した。

様々な外部講師と語り合う機会をつくる

探究学習の専門家など、多様な外部講師を招いて講演会を実施。生徒が自身の探究テーマについて講師に直接相談できる時間も設けた。

※学校資料を基に編集部で作成。

ろな考えに触れて多様性に気づく中で、社会性が養われます。そうした経験は、本校の生徒には特に価値があると思っています」

以上のような活動によって、自分や他者に向き合う準備をした生徒たちは、5W2H（「When（いつ）」「Where（どこで）」「Who（誰が）」「What（何を）」「Why（なぜ）」「How（どのように）」「How Much（いくらで）」）の視点から、自分の興味のあるテーマについての考察をスライドにまとめ、発表し、2年次以降の「社会を知る」、「進路を知る」活動へとつなげていく。

「総合的な探究の時間」を4年間経験した生徒が、2022年度末に卒業した。卒業生が高校生活での学びを振り返り、在校生に語る講演では、「進路選択で迷った時に、マンダラートを使って自分の考えを整理した」「自分の得意を自己分析で見つけ、それを生かせる資格を取得し、就職につなげた」などと、探究学習が進路選択に生かせたことを話した生徒もいたという。

「資格の取得に挑戦する生徒が増えたのは、自分の内面に向き合い、将来を考え、今すべきことに取り組む力が身についたからでしょう。22年度の卒業生には、アルバイトを継続する者はほとんどおらず、それぞれ就職先や進学先を決めていました。ただ卒業するだけの学校から、次の進路に踏み出せる学校になったのではないかと思っています」

同校では、探究学習を取り入れた学年で、基礎力診断テスト（＊2）の国語の成績が向上した。探究学習におけるまとめ・表現の経験が効果として表れたと、西山先生は考えている。

「どの生徒も持っている『伸びしろ』がいかに大きなものであるかを、探究学習が改めて私に教えてくれました」

2学年担任
西山正三
にしやま・まさみ

教職歴24年。同校に赴任して4年目。理科。前任の宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校で探究学習に長くかかわる。

学校概要

◎設立　1974（昭和49）年
◎形態　定時制（昼間・夜間）、通信制／普通科／共学
◎生徒数　1学年約20人（定時制夜間）
◎2021年度進路実績（現役のみ）　4年制大には、千葉商科大、南九州大、宮崎産業経営大に4人が合格。短大・専門学校進学7人。就職4人。

ウェブオリジナル記事では、1年次の哲学対話の様子や、進路の目標を見つけた生徒のエピソードなどを紹介！（右記の2次元コードを読み込み、またはクリックしてアクセス）

VIEWnext ONLINE ▶

※プロフィールは、2023年3月時点のものです。

働き続けるための資質・能力の育成

全学年

変化する社会で、成長し続ける人材を育てる

いわゆる「3年後離職」は、高卒者においては35・9％（2019年3月卒業者・厚生労働省調べ）と依然として高く、就職指導担当の教師にとっては軽視できない問題の1つだ。ある教師は、「早期離職者に理由を聞くと、賃金を含む労働条件や仕事内容とのミスマッチのほかに、職場の先輩などとの人間関係を挙げるケースが目立つ」と語る。科学技術の発展に伴って、職場で必要とされるスキルは早いスピードで変わっており、そうした状況下で働き続けるためには、自分が置かれている状況を理解し、自ら目標を設定した上で、職場の先輩や同僚とともに学び続けるといった幅広い資質・能力が必要だ。

そこで今回は、社会で求められる資質・能力を整理し、その育成を通して、就職後も自ら学び、成長を続けられる人材を育てることを目指す、石川県立小松工業高校の取り組みを紹介する。

実践事例

社会で求められる学びの羅針盤を策定

石川県立小松工業高校

地元企業の声に耳を傾け、学校全体の教育改革に着手

世界的な建設機械メーカーや電子部品メーカー、日本一のシェアを誇るパーティションメーカーなど、国内有数の企業が事業所や工場を置く石川県小松市。例年、卒業生の約8割が就職する石川県立小松工業高校でも、生徒の多くが県内の企業に就職してきた。だが、人材供給という地元企業の期待に応え続けるためには、教育活動の改善が必要だと感じるようになったと、進路指導課主任の中田嘉和（よしかず）先生は語る。

「地元企業から話を聞く中で、若手社員のコミュニケーション能力や、周囲との関係の中で学び続ける力が不足していることを実感しました。また、自己肯定感が十分に育まれていないため、就職後も自分に自信を持てない若者が多いことも課題だと分かりました」

教育活動の改善の契機としたのが、2022年度から実施された新学習指導要領だったと、教務課主任の下出純央（しもですみおう）先生は振り返る。

「新学習指導要領の実施に向けた準備を進める中で、これからは、学校全体で生徒の状況や課題を整理する必要があるのではないかという声が高まっていきました。そこで、各学科・教科の主任から成る学習指導委員会を立ち上げ、企業や保護者の声なども踏まえて、学校として育成を目指す資質・能力を整理することにしました」

学習指導委員会では月1回、生徒に育成したい資質・能力について議論した。その際、採用試験で不合格になった生徒の特徴や、授業中の生徒の様子から感じた課題など、具体例を共有しながら、自校で育成を目指す資質・能力を検討した。そうして1年間かけてまとめたのが、生徒に必要な資質・能力を、新学習指導要領で示されている資質・能力の3つの柱とひもづけた「小松工業ラーニングコンパス（以下、ラーニングコンパス）」（図）だ。

＊ベネッセのアセスメント「進路マップ」の1つで、義務教育範囲も含めた基礎学力を測るマーク式テスト。

変化の激しい社会に飛び込む生徒に伴走

日々の授業が変わり、生徒にも成長が見られ始めた

「ラーニングコンパス」の策定によって、様々な授業改善が進んでいる。例えば、以前から基礎学力の定着と生徒の自己肯定感の醸成のために、基礎力診断テスト（＊）の前後の指導に力を入れてきたが、各授業において、授業のねらいの確認と振り返りを必ず行うようになった。また、授業の目的と「ラーニングコンパス」の中の資質・能力とのつながりを確認してから授業をスタートしたり、社会対応力の育成を目指して80文字以内の文章で論理的に授業を振り返る取り組みを続けたりするなど、それぞれの教師が工夫している。

探究学習の充実も進んでいる。22年度の1年生は、前半はSDGsを切り口とした個人探究に、後半はグループ探究に取り組んだ。

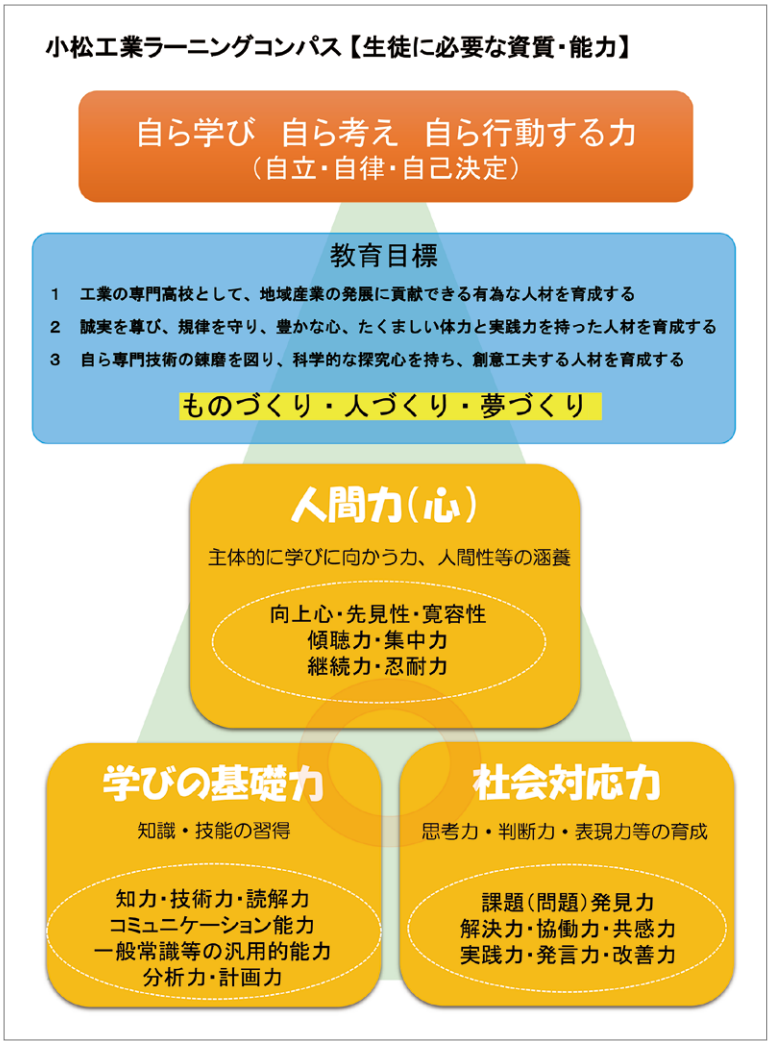
「これまで、3年次の課題研究では、生徒は指導教師の助言を基に研究テーマを設定していました。しかし、1年次から継続して協働的な探究プロセスを経験させることで、3年次には自分の力でテーマを発見することができるようにしようと考えました。そして、様々な人の力を借りて物事に取り組める生徒を育てていきたいと思っています」（下出先生）

「ラーニングコンパス」を指針とした改革が進む中、生徒にも変化が表れているという。

「いつも『どうすればいいんですか？』と答えを聞いていた生徒が、『これでいいですか？』と、まず自分の考えを示すようになるなど、生徒も『ラーニングコンパス』を意識し、自己変革に取り組んでいると感じています」（中田先生）

今後は、就職希望の3年生を対象にした面接指導に参加する企業担当者にもラーニングコンパスを共有するなど、地域と協働した人材育成を進めていく考えだ。

図 育成を目指す資質・能力を表した「小松工業ラーニングコンパス」



※学校資料をそのまま掲載。

進路指導課主任
中田嘉和 なかた・よしかず
教職歴 34 年。同校に赴任して8年目。

教務課主任
下出純央 しもで・すみおう
教職歴 29 年。同校に赴任して 4 年目。

学校概要

◎**設立**　1939（昭和 14）年　◎**形態**　全日制／工業科（機械システム科、電気科、建設科、材料化学科）／共学　◎**生徒数**　1学年約 230 人

◎**2021年度進路実績（現役のみ）**　4年制大は、富山大、金沢学院大、金沢工業大、金沢星稜大、福井工業大などに延べ 33 人が合格。短大・専門学校進学 31 人。就職 163 人。

※プロフィールは、2023 年 3 月時点のものです。

off Shot

この度、数年ぶりに VIEW next 編集部に戻ってまいりました。今号の取材で伺った茨城県・私立東洋大学附属牛久中学校・高校では、生徒たちが授業でタブレット端末を自然に活用していて、現場の大きな変化を目のあたりにしました。写真は、同校の図書館です。天井が高く、日差しが降り注ぐ気持ちのよい場所で、昼休みには生徒たちが本を囲んで談笑する姿が。私にとっても見慣れた風景にホッとした気持ちになりました。

人は人との交わりの中でしか育たない――尊敬する先生のお言葉の一部です。私もこれまで先生方にたくさん育てていただきました。社内外のメンバーからの支えも実感する日々です。社会状況に応じて変わるものもあれば、決して変わらないものもある。いただいたご縁に感謝を忘れず、私にできることでお返ししていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。（青木）

電子ブック

VIEWnext 高校版は

電子ブックで閲覧できます

『VIEW next』高校版、『VIEW21』高校版 2020 年 4 月号以降の記事は、電子ブックでご覧いただけます。ウェブサイト『VIEW next ONLINE』でご確認ください。

HOME →学校教育情報誌『VIEW next』→高校版バックナンバー

https://view-next.benesse.jp/

VIEWnext

高校版　2023 年 6 月号

6月20日発刊

（予定）

『VIEW next』高校版は
年 6 回の発刊です。
次号、創刊 400 号を迎えます！

Reader's VIEW

先生方からのご意見を紹介します

2023 年 2 月号へのご意見

生徒の視点も踏まえた学習評価を目指す

観点別学習状況の評価の充実に向けて、本校においても、夏季休業中と冬季休業中に校内研修を行った。教師間で共通理解を図りながら、各学期の学習評価の状況を分析して軌道修正をするとともに、課題を明らかにして、今後の改善策を検討してきた。そうした中で、２月号の特集を読み、これまでの本校の取り組みは、教師の視点の一方向であったことに気づかされた。これからは、生徒の視点も踏まえた評価を考えていきたい。

兵庫県　匿名希望

教師と生徒の評価をどうすり合わせるか

学習評価に関する今の悩みは、教師が行う評価と生徒の自己評価とのすり合わせである。２月号の特集には、具体的な生徒への伝え方やそれによる生徒の変容が描かれており、改善を模索する各校の姿があった。それを励みに、本校なりの方法を見つけたいと思った。

長野県　匿名希望

風通しのよい、挑戦できる環境づくりに尽力したい

２月号の「輝く学年団を訪ねて」の記事を読み、情熱を奮い立たされるような思いがした。同じ学校に長い間在籍し、経験を積んでいくと、前例を踏襲しがちになってしまったり、最初は違和感があったことも、あたり前になってしまったりすることがある。長野県小諸（こもろ）高校の生駒（いこま）圭一先生の「新しいことも恐れずにやってみよう」という情熱は、とても大事だと感じた。また、新しいことに挑戦することができ、失敗しても受け入れてくれるような風通しのよい学校文化や、チャレンジングな主任がいる環境は、とてもよいと思った。自分もそのような環境をつくっていけるように尽力していきたい。

静岡県立吉原（よしわら）工業高校　松山 陸

メンター制度の話題提供として、教師皆で読む予定

若手教師の多い本校では、「マイ・ストーリーを語れる生徒を育む進路指導」を参考にしている。「２年次 推薦型選抜の準備」がテーマだった２月号も、メンター制度についての話題提供として、教師皆で読もうと考えている。大学入試は、選抜方式にかかわらず、生徒が自分を見つめて成長する機会となる。メンター制度によって生徒と教師が丁寧に対話する機会を設けることで、「自分に足りないもの」を生徒自身に気づかせる指導が参考になった。

静岡県立小山（おやま）高校　美那川（みなかわ）雄一

自分と向き合うことが苦手な生徒への指導のヒントに

２月号の「クローズアップ！ 就職指導」を読み、「自分を知り、自分を育てる２つのシート」を本校でも活用したいと思った。年々、教師が生徒に「なぜ？」と問う必要性が増しているように感じる。自分のことについて考えるよう、生徒に伝えても、「面倒くさい」といった言葉が返ってくることが増えた。同シートを活用すれば、自分と向き合うことが苦手な生徒でも自己分析をしやすいのではないかと考えた。

富山県　匿名希望

INFORMATION

VIEWnext 編集部からのお知らせ

VIEWnext ONLINE 新コンテンツ続々更新中！

教育総合情報サイト『VIEW next ONLINE』では、学校関係者や保護者、そして教育に関心のある方へ、最新の教育情報や教育に関するオピニオンをお届けしています。『VIEW next』高校版のバックナンバーに加え、以下のような様々なコンテンツを公開していますので、ぜひご活用ください。

アクセスはこちらから！

URL https://view-next.benesse.jp/

検索ワード VIEW next ONLINE 検索

2次元コード

教育ニュースn-express

学校教育、教育ICT、教育行政など、教育に関する旬のニュースを発信しています。

教育オピニオン

各界の有識者が、教育に関するオピニオンや教育への思いを発信します。

教育なんでも相談室

学校や家庭における、学習・進路・生活に関する保護者の悩みに、豊富な知見を持つアドバイザーが丁寧にお応えします。

学校教育情報誌VIEWnext

学校教育情報誌『VIEW next』高校版の電子ブックやコーナー別のPDF、ウェブオリジナル記事をご覧いただけます。

本誌と連動したウェブオリジナル記事もぜひご覧ください！

TOPページ→ 学校教育情報誌『VIEW next』からご覧いただけます。

ダイジェスト動画

誌面で紹介した授業実践が動画で見られます。今号は、「歴史総合」と「英語」の授業です。

発問・課題設定をキーに見る
主体的・対話的で深い学び
授業実践

今号 P.42–49 と連動

茨城県・私立東洋大学附属牛久中学校・高校の本保泰良先生は、生徒の「なぜ」を重視した「歴史総合」の授業を行っています。

神奈川県立川和高校の福田理奈先生の「英語」の授業では、課題解決型学習の成果を英語で発信する活動を行っています。

本誌連動記事

「もっと知りたい！」の声にお応えして、誌面でお伝えしきれなかった内容をご紹介します。

これからの進路指導のための
世の中トレンド解説

今号 P.40 と連動

今号のトレンド・ワード「リスキリング」が社会に広まることによる変化を、「学ぶ・働く・暮らす」の視点から掘り下げます。

マイ・ストーリーを語れる生徒を育む進路指導

今号 P.50–51 と連動

宮崎県立宮崎東高校 定時制課程夜間部の、「自分を知る」探究学習に取り組み、進路の目標を見つけた生徒のエピソードなどを詳しくご紹介します。

北海道・私立帯広大谷高校
小原啓太先生
Kohara Keita

生まれ育ったまちを担う生徒を支える

「家」では、学習習慣がつきづらい」という生徒の声を受けて7年前、放課後や休業中の自習室として、校内に「大谷塾」を設けました。塾の出入りは自由ですが、常に張り詰めた空気があり、「皆が集中する姿に励まされる」と、毎年3年生を中心に、30人程の生徒が参加しています。私も生徒からのどんな質問にも答えられるようにと、塾では大学入試の過去問題などに取り組んでいます。かつては、学力向上を意識するあまり、「勉強を頑張れ」と、生徒に言い続けていました。すると、生徒はかえって学習から遠のきました。その苦い経験が、生徒の主体的な学びを促す環境づくりにつながっています。

生徒が将来を考える場を小まめに設けることも心がけています。塾で努力して難関国立大学に入学したものの、学びたいことが明確でなかったため、大学での学びにつまずいた生徒がいたからです。そこで、多様な視点で将来を考えられるよう、地元企業と生徒との座談会や、道外の大学見学ツアーなどを行いました。コロナ禍を受け、生徒に新聞記事の中から関心のある事柄について調べて発表する「夢ノート」を作成させたり、大学に依頼して個別にオンライン説明会を開いてもらったりするなど、生徒と社会や大学をつなぐ活動に力を入れています。

私は十勝で生まれ育ちました。そして、ふるさとの子どもたちが夢を実現することを支援する仕事に就きました。生徒が将来、地域を盛り上げる存在となれるように、私ももっと勉強し、アイデアを出して、生徒の学びを支えていきたいと思っています。

生徒より

部活動の後でも、毎日大谷塾で勉強を続けられたのは、仲間がいたからです。粘り強さや、やり遂げる力がつき、自信になりました。「夢ノート」で社会に目を向けたことや、大学の先生とオンラインで1対1で話したことは、進路選択の手がかりになりました。「自分のためだけではなく、他者のためにも勉強しよう」と、小原先生はいつも言われていました。卒業しても、その言葉は忘れません。これまでの自分を支えてくれた友人や先生、家族に感謝し、これからは自分が誰かの役に立てるよう、学び続けていきます。

こはら・けいた 教職歴13年。同校に赴任して13年目。進路指導部。理科。3学年担任。

北海道・私立帯広大谷高校 全日制／普通科／共学／1学年約260人／2022年度入試合格実績（現浪計）国公立大は、小樽商科大、帯広畜産大、北海道教育大、北海道大、弘前大、宇都宮大、釧路公立大、公立千歳科学技術大などに25人が合格。私立大は、法政大、関西大などに延べ371人が合格。

※プロフィールは、2023年3月時点のものです。

VIEW next［ビューネクスト］高校版 2023年4月号　2023年4月14日発行　通巻399号　［発行人］田村隆憲　［編集人］柏木 崇　［発行所］(株)ベネッセコーポレーション 学校カンパニー VIEW next 編集部　〒151-0061 東京都渋谷区初台1-53-6 初台光山ビル
©Benesse Corporation 2023

お客様サービスセンター
フリーダイヤル 0120-350455 ［受付時間］月～金8:00～18:00／土8:00～17:00（祝日、年末・年始を除く）
3KVOL1　株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社　〒700-8686　岡山市北区南方3-7-17